コードギアス 魔王の弟

ボートマン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

愛する家族の行方を知るためにエリア１１に向かう。

コードギアスにロロ以外の弟がいたらという作品です。

目次

第1話 1
第2話 3
第3話 7
第4話 10
第5話 17
第6話 23
第7話 30
第8話 35
第9話 41
第10話 45
黒の騎士団ルート
第11話 53
第12話 59
第13話 66
第14話 72
第15話 76
第16話 82
第17話 84
第18話 90
第19話 96
第20話 101
第21話 106
第22話 112

第1話

「母様！兄様！ナナリー！」

花畑にいる一人の女性と二人の子供を呼ぶ子供の声が聞こえ、またこの夢かと思った。

子供は駆け寄ろうとして転びそうになるが、子供の兄が受け止めたことで転ぶことはなかった。

「全くお前は相変わらずそそっかしいな。」

子供を受け止めた兄は弟の落ち着きのなさに呆れていた。

「ふふ、でもこの子らしいからいいじゃない。」

「お母様の言う通りですよお兄様。」

そんな子供を母と妹は楽しそうに微笑えんでいた。

この時間が何時迄も続いて欲しいと幼い頃は願っていた。

だが、子供のそんな願いは叶うことはなかった。

次に見たのは兄の部屋で雑談する兄と子供の姿だった。

何気なく話していると、突然部屋の扉が開かれ1人の警備官が入ってきた。

「何だお前は！皇族の部屋に無断で入るとは無礼だぞ！」

入ってきた警備官を兄が叱責するが、警備官はそれどころではないという様子だった。

「大変です殿下！マリアンヌ王妃が！ナナリー殿下が！」

警備官のそのあとの言葉に兄と子供は受け止めることができなかった。

そして、警備官に連れられ兄と子供が向かった先に目にしたのは、血塗れで倒れる母とその母に抱かれている妹だった。

そこで夢は終わり少年は目を開けた。

「また、この夢か。」

何度も何度も見るこの夢は幼き頃の楽しかったあの時間に戻りたいのか、それともあの忌まわしい惨劇を忘れさせないために見せているのか少年には分からなかった。

あの後、何故か自分だけは本国に残され、兄と妹は異国の地に外交

のカードとして送られた。
そして、本国で二人の帰りを待つ自分に、二人が戦争で亡くなったと知らされた。
それから時が経ち、成長した少年はあの忌まわしい惨劇を知るためにある場所に赴いていた。
「そろそろか。」
気持ちを切り替えないといけないと思い外を見ると、そこには目的地と思われる場所が見えた。
「ここが、エリア11・・・か。」
軍用機の中から少年が呟いたこのエリア11は、かつてはサクラダイトというレアメタルを多く産出する経済国だった。
しかし、日本は宣戦布告した神聖ブリタニア帝国に呆気なく敗北し、日本はエリア11と名を変えられ原住民である日本人もイレヴンと名を変えることになった。
そして、この異国の地であるエリア11で少年は大切な家族を失ったのである。
少年の名はサフィール・ヴィ・ブリタニア、マリアンヌ王妃の次子にして第20皇位継承者であり第12皇子である。
大切な家族を失ったこの地にサフィールは足を踏み入れる。

第2話

空港に到着した軍用機を降りたサフィールを出迎えたのは、多数の機動戦闘車に第五世代ＫＭＦ（ナイトメアフレーム）サザーランドに警備兵と厳重な警備だった。

「これほどの警備とは凄いな。」

厳重な警備に少し驚いていると、サフィールの元に一人の少女が近づいてきた。

「サフィール、ようこそエリア１１。」

自分を出迎えに来たと思われる少女にサフィールは先程の警備を見た時より驚いていた。

「ユフィ姉様・・・」

サフィールを出迎えたのは同じ皇族であり、このエリア１１の副総督であるユーフェミア・リ・ブリタニアだった。

「車を用意してます。こちらです。」

ユーフェミアに案内されて用意された車に乗り込むと、車は総督府に向けて発車した。

「（まさかユフィ姉様が迎えに来るとは、久しぶりに会うし何て声をかければいいか）」

総督府に向かう中、サフィールは久しぶりに会うユーフェミアに何と声かければいいか分からず悩んでいると

「サフィ！」

「はいっ！」

ユーフェミアの自分を呼ぶ声に驚き、サフィールは変な声を出してしまった。

「ふ、副総督!?どうされましたか？」

「もう！さっきから呼んでいたんですよ。」

「すみません副総督。」

サフィールが副総督と言うとユーフェミアは、何か不機嫌そうにしていた。

「えっと、どうされんですか副総督？」

「それ！」
「えっ？」
「その呼び方です！」
　呼び方と言われそういうことかとサフィールは思った。
「ユフィ・・・姉様。」
　幼い頃の呼び方でいうとユーフェミアは笑顔で満足そうに頷いていた。
「やっと・・・そう呼んでくれましたね。」
　その笑顔にサフィールは見惚れていたが、すぐにハッと我に返った。
「ええと、これからもこの呼び方ですか？」
「駄目ですか？」
　ユーフェミアは何が駄目なのか分からず首を傾げていた。
「流石に兵達の前でこの呼び方は、それに・・・ちょっと恥ずかしいですし。」
「う～ん、わかりました！では二人でいる時だけはちゃんと呼んでくださいね。」
　呼ばないという選択肢は無く、呼ぶことは絶対となっていた。
　それから総督府に向かう間どうにか呼ばないように説得を試みたが、頑なに頷くことをせず結局二人でいる時だけということになった。
　そして、車は何事もなく総督府に到着し、サフィールはユーフェミアと共にこのエリア１１の総督であり異母姉であるコーネリアがいる執務室に向かった。
　それからユーフェミアに案内され執務室に到着した。
「（それにしても、とても広かったな。）」
　総督府はかなり広く、もし自分一人だけだったら迷ってしまっていただろう。
「じゃあいきますよ。」
　ユーフェミアはそう言われ、サフィールは執務室の扉をノックした。

「入れ。」
部屋から女性の声が聞こえ、サフィールは扉を開けた。
「失礼します。」
「来たか、サフィール。」
執務室には書類に目を通すコーネリアと、コーネリアの騎士であるギルフォード卿にダールトン将軍がいた。
「本日は突然の訪問を許してくれてありがとうございます総督。」
「うむ。それで今回の訪問の目的は何だ?」
「はい。ゼロというテロリストに興味を持った事とジェレミアの事で。」
ゼロとジェレミアという言葉にコーネリアは書類に目を通す作業を止めた。
「ジェレミア・・・そういうことか。」
どうやら私がこのエリア11に訪問した理由が分かったのだろう。
「いいだろう。お前には純血派の指揮を任せるが基本的には私の指示に従ってもらう。」
「あ、ありがとうございます総督。」
姉の気遣いにサフィールは嬉しく思い、昔のように呼んでしまいそうになるが流石に呼んだら怒られそうなのでグッと抑えた。
「話は以上か?なら私は見ての通り忙しい。」
そう言うと再び書類に目を通す作業を再開した。
このまま居ても邪魔になってしまう為サフィールは我慢し執務室を退室した。
それからジェレミアが部屋に向かうもと初めてくる総督府に迷ってしまい、近くにいる兵士に場所を聞き部屋に向かった。
近くの兵士に聞いた時、最初は迷子かと思われていたが皇族だと分かると酷くうろたえていた。
そして、ジェレミアがいる部屋の場所を聞き、迷うことなく部屋に到着した。
深呼吸し扉をノックすると褐色肌の女性が出てきた。
「子供がここに一体何のようだ?」

やはりここでも迷子と思われているようだ。
「初めまして私はサフィール・ヴィ・ブリタニアといいます。この部屋にいるジェレミア卿に用があってきたんですが。」
サフィールはそう言うと、女性は目の前の少年が皇族だとわかりすぐさま跪いた。
「も、申し訳ありません！サフィール殿下！」
「気にしないでください、それより中に入っていいでしょうか？」
「は、はい！」
部屋の中に入ると机に項垂れている男がいた。
「ジェレミア？」
「ん？誰だ一体？」
顔を上げた男がサフィールを見ると立ち上がり、まさかというような表情をしていた。
「あ、貴方様は・・・まさか!?サ、サフィール様なのですか？」
自分の事をまだ覚えていることに驚いていた。
「私のことを・・・覚えているんですか？」
「はい。マリアンヌ様が御存命だった頃に一度だけ拝謁させていただきました。」
サフィールの問いにジェレミアは跪きながら答えていた。
「私がここに来たのはコーネリア総督から純血派の指揮を任されたからです。」
「なんと！それは本当ですか!?」
「本当です。」
「お、おおお！私のようなものが貴方様に仕えることが出来るとは！」
本当だと分かるとジェレミアはかつて忠義を誓った主の息子に仕えることが嬉しいのか泣き出した。
「ですが私には至らない所があるかもしれませんが、これからはよろしくお願いします。」
「イエス、ユア・ハイネス！」
未だに泣いているジェレミアと褐色肌の女性は共に膝をつき、自分に従ってくれることにサフィールは嬉しかった。

第3話

それから褐色肌の女性ヴィレッタから現在所属している純血派の騎士達を呼び出してもらった。

集まった純血派の騎士達の数は少なく、ジェレミアの失脚から純血派に未来は無いと見限った者達が離れていったようだ。

だが、それでも純血派として成り立っているのはヴィレッタとキューエルという男性が纏めているおかげだろう。

突然呼び出された騎士達は何故呼び出されたのか分からず、部屋にいるサフィールを怪しげにチラチラと見ていた。

「初めまして皆さん、今日より純血派の指揮を任されたサフィール・ヴィ・ブリタニアです。」

サフィールが自己紹介した途端、室内は皇族が指揮官になる事に騒がしくなった。

「ええい！静かにしないか！殿下の御前だぞ！」

ジェレミアが叱責するも静かにはならなかった。

とはいえ今のジェレミアが言っても素直に聞くとは思えなかった。

現在落ち目の純血派に皇族が指揮官になった事がとても衝撃的なようだ。

「突然のことで驚いているのは分かりますが、私が貴方達の指揮をする事は変わりません。これからは私の命令に従ってもらいます。話は以上です。」

そう言うと騎士達も少しずつ落ち着きだし、室内を退室し残ったのはサフィールと幹部であるジェレミアとヴィレッタにおそらくキューエルと思われる男性は残った

「さて、キューエル卿、突然のことで驚きましたか？」

「い、いえ！そのようなことは！」

「無理に畏まらないでください。皇族とはいえ私は総督のように優れた武力や智慧を持っているわけではないですから。」

姉であるコーネリアを思い出して比べてしまい、苦笑しながら自虐してしまった。

「そんな！殿下には素晴らしい才能は必ずあります！」
ジェレミアが励まそうと言うが、それでも自分と兄と姉には差があるのは事実である。
「あはは、ありがとうジェレミア。すまないがヴィレッタ卿、キューエル卿、ジェレミアと話したいことがあるから。」
話したいことがあると言葉を察したのか二人は急いで室内を退室した。
「さて、ジェレミア、母様が賊によって殺された日の事で聞きたいことがあります。」
「あの日の事は今でも覚えています。」
「そうですか。あの時のことを調べても詳しい記録はありませんでした。だから、あの時何かおかしな事はありましたか？」
「あの日、初任務でマリアンヌ様の護衛を任された時おかしな事と言えば、何故か警護隊がいなかったことかと。」
「警護隊がいない？」
ジェレミアの言葉にサフィールはどういうことだと思った。
「ジェレミアはその時の警護担当を覚えていますか？」
「あの時の警護担当は確か・・・コーネリア総督だったはずです。」
「姉様が？」
コーネリアが警護担当と聞き一体どういうことだと思った。
コーネリアは母であるマリアンヌを今でも敬愛しており、あの日の警備隊を外すとは到底思えない。
「今ここで考えても仕方ないか。」
今すぐにでも聞きにいきたい衝動に駆られるが、答えてくれるか分からずはぐらかされる可能性もあるため今は待つことにした。
「それじゃあジェレミア、ゼロとの一件では何があったの？」
ジェレミアにとってはあの一件は思い出したくないことかもしれないが、何が起こったのかは本人から聞くのが一番だ。
「あの一件に関しては、あまり・・・覚えていないんです。」
「覚えていない？」
ジェレミアの発言にサフィールはどういう事だと首を傾げた。

「ゼロが私に近づいてきてオレンジという言葉を言った途端その後の記憶が無いのです。」
「ふむ。」
サフィールは腕を組み話の続きを聞く。
「気がつけば私はゼロを逃がすどころかその逃走を幇助し、あまつさえ味方に攻撃したという映像が残っていて。ですが私には全く身に覚えがないのです。」
聞けば聞くほどのおかしな話のように感じられる。
目の前の男の忠誠心は会ってわかるが疑いようがないくらい熱く、そんな男がその忠誠心を捨ててテロリストを手助けするとは思えない。
「ジェレミア卿、私は母様に忠誠を誓った貴方の言葉を信じます。」
「おお、殿下が、殿下がこの私の話を信じてくれるとはまことにありがとうございます！」
ジェレミアは再び泣きながらこちらに向かって頭を下げた。
「頭を上げて下さいジェレミア卿。私はゼロを捕まえることで貴方の汚名を返上するつもりです。その為に私に力を貸してくれますか。」
「イエス、ユア・ハイネス！」
ジェレミアはサフィールの前で跪き、目の前の少年に忠誠を誓うのであった。

第４話

サフィールが純血派の指揮をとることになって数日が経った。
サフィールは純血派の執務室で頭を抱えていた。
「また・・・駄目だった。」
頭を抱えている理由は、純血派が未だに前線に出させてもらえてないからだ。
何度も前線に出させてもらえるように頼んでいるが、未だに許可が下りないのだ。
「はぁ・・・」
「殿下！お気を確かに！」
ジェレミアが励ましの言葉をかけるが、下りない理由がジェレミアであるためどう言えば言いんだろうと思った。
「貴様のせいで許可が下りないんだ！」
だが、キューエルはハッキリとジェレミアが原因だと言ってしまった。
自分のせいだと分かるとジェレミアは泣き出した。
「おぉ、不甲斐ない私のせいで殿下にご迷惑を！」
「ジェレミア卿しっかりして下さい！」
そして、そんなジェレミアをヴィレッタが慰めるというのを最初は驚いたが、何度も見ているためサフィールは慣れてしまっていた。
「とはいえなぁ・・・」
このまま前線に出させてもらわなければ純血派の評判を上げるどころか、自身にどれだけの力量があるか測ることもできない。
そう思っていると執務室の端末が鳴り始めた。
「こちら純潔派の執務室だ。」
ヴィレッタが端末を取って出て対応する。
「それは本当か！」
驚いた声を出したヴィレッタにサフィールや泣いていたジェレミアと苛立っていたキューエルも視線をヴィレッタに向ける。
通信が切ったヴィレッタ端末を置くとこちらに振り返った。

「殿下お喜びください！前線への出撃許可がおりました！」
「それは本当ですかヴィレッタ卿？」
「はい。コーネリア総督の許可も出てます。」
ついに出撃の許可が出たことにサフィールは喜び、ジェレミア達もサフィールと同様の気持ちであった。
「キューエル卿は純血派の全メンバーの召集をお願いします！」
「イエス、ユア・ハイネス！」
「ヴィレッタ卿、それで場所は？」
「はっ！場所はサイタマゲットーです。」
場所を確認するとキューエル卿からの召集で集まった純血派の全メンバーが来た。
「諸君！これより我が純血派は戦場に赴きます。この期に汚名を返上すると同時に純血派の力を見せつけましょう！」
「「イエス、ユア・ハイネス！」」
それからサフィール率いる純潔派はコーネリアの率いる正規軍と直属の親衛隊に加えてもらいサイタマゲットーに向かった。
サフィールはG1ベースで指揮を執るコーネリアに呼び出されていた。
「サフィール、お前は今回の作戦をどう見る。」
「今回の作戦は名目はテロリストの殲滅ですが、本命はやはりゼロですか？」
さすがにテロリストの殲滅だけに皇族が度々出る必要はない。
それだけなら軍部の人間の誰かを指揮官に任命して派遣すればいいだけだ。
「そうだ。とはいえこちらの誘いに奴が乗るとも考えられんが。」
サフィールも報告書を見たがゼロは策士と呼んでもおかしくないほどの切れ者であり、今回の作戦に来ないとも考えられる。
「総督、私見でよろしければ発言しても？」
「構わぬ言ってみろ。」
「はい。おそらくですがゼロは来ると思われます。」

来るというサフィールの言葉にコーネリアは探るような視線を向けた。
「ほう、その根拠は？」
「ゼロは皇族を殺めたことで注目されてます。もし皇族を狙っているなら今回も食いついてくるはずです。それにこの地区のイレヴンを見捨てれば、ゼロはその程度ということです。」
サフィールの述べた根拠にコーネリアは目の前の異母弟に感心していた。
「なるほど。サフィール、私もゼロは来ると読んでいる。」
「総督もですか。」
「ああ、とはいえお前の考えとは違うがな。」
自分の根拠とは違うという言葉に、サフィールはどんな根拠があるんだろうと気になっていた。
「ゼロは劇場型の犯罪者だ。あのようなタイプは己の力を過信している。」
「なるほど。その過信を逆手に取ると。」
そこまでの分析にサフィールは流石だと思った。
「それでお前はどうする？」
「総督が許可してくれるのであれば、私も出撃するつもりです。」
「お前も出撃すると？」
サフィールも出撃するということに嫌そうな表情をしていた。
「はい。自身の力量がどれほどかを測るには丁度いい機会と思いまして。」
コーネリアは暫く目を閉じて何か考えている様子だった。
「いいだろう。だが、先鋒は任せるがこちらの命令には従ってもらう。」
「わかりました。それでは失礼します姉上。」
指揮所を出たサフィールは格納庫に向かった。
「機体の調整は？」
「すでに完了しております。」

「ご苦労。」
今回の出撃のために用意されたグロースターに搭乗する。
通信チャンネルを設定し純血派と繋げる。
「各機、準備はいいか！」
「全機問題ありません。」
すでに出撃して待機する純血派は準備万端のようだ。
『全軍に告げる！これよりサイタマゲットー壊滅作戦を開始する。全軍第一戦闘配置に移行！』
作戦開始命令が出され、Ｇ１ベースからサザーランドが続々と発進する。
サフィールのグロースターも肩とファクトスフィアを赤く塗装した純血派のサザーランドと合流する。
そこから先は蹂躙の一言しかでなかった。
小火器程度の武装のテロリスト相手に苦戦しろという方が無理な話である。
「・・・怨んでくれても構わない。」
そんな中サフィールは小さく呟きながら引き金を引く。
テロリストではない一般人を撃つことに抵抗を感じるが、そこで見逃してしまえばまたテロを起こす可能性がある。
辛く感じながらもサフィールはただ引き金を引いていた。
徐々に包囲網を狭めていたが、突如味方機のシグナルがロストし始めた。
「司令部、何があった？」
『はっ！どうやら敵が我が軍のサザーランドを鹵獲して反撃している模様です。』
司令部からの報告でサフィールはゼロが来たことがわかった。
『それと・・・』
「何だ、まだ何か？」
『コーネリア総督が外縁部まで下がるようにと命令が・・・』
「姉様が？」
総督ではなくつい昔に呼び方になるほどサフィールは驚いていた。

確かに被害は出てるが勝てないというわけではなかった。
それでも命令には従うように言われたため、すぐに行動に移した。
「了解した。全機外縁部まで後退する。」
『イエス、ユア・ハイネス』
それからダールトン将軍が通信でも全部隊に後退するよう命令し始めた。
全部隊が外縁部に集結が完了し、姉様は何を考えているんだと思っていると、直属の騎士であるギルフォードのグロースターと親衛隊グロースターがゲットーへと向かっていた。
それから味方のサザーランドのシグナルが出たが、それを親衛隊のグロースターにより破壊された。
「そういうことか。」
すでに全部隊は後退しているため、あの場にいるのは鹵獲されたサザーランドしかいない。
そのため味方のシグナルを出しても意味は無い。
それから何度も味方のシグナルが出るが、その度に親衛隊によって破壊された。
そして、怖じけずいたのか今頃になって降伏してきたが、ブリタニアの魔女と恐れられたコーネリアに降伏など意味はなかった。
「やっぱり姉様は凄いな。」
敵の手をあっさりと読み、それを薙ぎ払う親衛隊の力も凄まじいものだった。
『全パイロットに告げる！ハッチを開け素顔を見せよ！』
コーネリアの指示にパイロット達は整列し、ハッチを開いて素顔を見せていた。
サフィールや純血派もハッチを開き、他のパイロットのように素顔を見せていた。
「殿下、これは一体？」
同じようにハッチから出たジェレミアが、なぜこんな事をしているのか分からずサフィールに聞いてきた。
「おそらく、この中にゼロが紛れ込んでいると考えられるから、素顔晒

してあぶり出すつもりなんだよ。」
「なるほど！そんな考えがありますとは。」
ジェレミアが納得していると、兵達が騒ぎ始めた。
「ゼロを発見！」
兵の言葉に視線を向けるとそこには廃墟の屋上に立っているゼロがいた。
兵達はすぐにゼロを確保しようとしたが、ゼロは飛び降り姿をくらました。
「ぜ、ゼロぉぉぉぉ！」
「お、落ち着いてください！ジェレミア卿！」
ゼロの姿を見たジェレミアが後を追おうとして、ヴィレッタがどうにか抑えていた。
「殿下、我らはどうしますか。」
そんな中キューエルは冷静にサフィールに指示を求めていた。
「すでに逃走ルートは確保してると思われます。おそらく逃げられるでしょう。それよりもこちらはジェレミア卿を抑えないと。」
「イエス、ユア・ハイネス！まったく！」
こうしてサフィールの初陣は幕を閉じた。

下水道に逃げ込み自らの軍を作ることを決心したルルーシュはあることを思い出していた。
「（あの場にいたグロースター、乗っていたパイロットは一瞬しか見なかった。）」
コーネリアの命令でパイロット達がハッチから出て素顔を見せていた時、サザーランドのなかに一機だけ親衛隊とは違うグロースターがいた。
グロースターの近くには純血派のサザーランドもいたが問題はそこではない。
そのグロースターから出たパイロットが気になった。
あの時焦っていて一瞬しか見なかったが、パイロットはナナリーと同じように大切な弟に見えた。

『兄様～！』

幼い頃に俺やナナリー、母さんによく懐いていた小さな子供。

母さんが亡くなって俺とナナリーが日本に送られた時、なぜかあいつだけは本国に残された。

ブリタニアと日本の戦争が起き、今では会うことが出来なくなった大切な弟。

「（本当に、お前なのか・・・サフィール）」

第5話

サイタマゲットーでの戦闘以降、ゼロの動きはなく平和な日々であった。

この日サフィールはゲットーの演習場にてジェレミアと模擬戦を行なっていた。

使用するのはサザーランドで武装はスタントンファだけに設定している。

「はぁぁぁぁっ！」

サフィールは正面からスタントンファを叩きつけるが、ジェレミアは回避し逆に叩き込んできた。

「くっ！」

咄嗟にスタントンファで受け止めるも、攻撃したで押さえきれずに機体が倒れてしまった。

「っつう！」

鈍い痛みが来て倒れた時にどこか身体を打ったのだろう。

「も、申し訳ありません殿下！お怪我は！」

倒れたサフィールにジェレミアが心配そうに聞いてきた。

「大丈夫です。問題はありません。」

機体を起き上がらせながらサフィールはそう答えた。

「本当に大丈夫ですか？」

「大丈夫ですよ。それより続きをお願いします。」

それでも心配そうに聞いてくるが、問題無いと答え模擬戦を続行する。

今度は蛇行しながら接近し、側面からスタントンファを叩き込む。

ジェレミアはスタントンファで受け止めると、体当たりする勢いで突っ込んできた。

「うわっ！」

サフィールは驚きながらも、どうにかすり抜けるように避けた。

だが、ジェレミアは旋回すると同時にスタントンファを叩きつけた。

この一撃にサフィールは対応できずくらってしまった。
そして、機体が撃破したことを示す『ＤＥＦＥＡＴ』の文字に変わり模擬戦は終了した。
開始位置に戻り機体から出ると、ジェレミアとヴィレッタが近づいてきた。
「お疲れ様です殿下、ジェレミア卿。」
ヴィレッタはサフィールとジェレミアに用意していたタオルを渡す。
「ありがとうございますヴィレッタ卿。」
「すまないなヴィレッタ。」
二人は模擬戦でかいた汗を拭き礼を述べる。
「殿下、本当にお怪我はありませんか？」
ジェレミアはまだ模擬戦で倒れた時のことを気にしているのか聞いてきた。
「本当に大丈夫ですよジェレミア卿。」
流石に心配しすぎだと思い言うが、それでもまだ心配しそうにしていた。
「殿下、よろしいでしょうか？」
「どうしましたか、ヴィレッタ卿？」
「実は総督が殿下に執務室に来るようにと連絡が来てました。」
「そうですか。ありがとうございますヴィレッタ卿。」
それから演習場から総督府に戻り、コーネリアの執務室に行く前にシャワーを浴び汗を流した。
少し遅れるとしても汗をかいたまま行くよりはいい。
「ふぅ。」
息を整え扉をノックする。
「入れ。」
「失礼します。」
扉を開けて中に入ると、中にはコーネリアとユーフェミアがいた。
コーネリアが部屋にいるのはわかるが、ユーフェミアも部屋にいることが気になった。

「遅れてしまって申し訳ありません。」
「構わん。呼びつけたのはこちらの方だ。」
「それで総督、要件は？」
サフィールは早速呼びつけた件について聞いてきた。
「うむ。サフィール、お前にはユフィと一緒に河口湖で行われるサクラダイト配分会議に立ち会ってもらう。」
「えっ！」
サクラダイト配分会議とはこのエリア１１で採取できるサクラダイトをブリタニアと諸外国でどう取り分けるか決める重要な会議である。
そんな重要な会議に自分が参加することに驚いていた。
「姉様、何故自分が？」
あまりの事に総督ではなく姉様と呼ぶほどサフィールは驚いていた。
その様子にコーネリアはまだまだだなと内心思うと同時に、昔の呼び方で呼ばれ嬉しかった
「お前も今のうちにこういったことに慣れる必要がある。だから今回の会議に立ち会ってもらう。」
「ですが・・・」
「異議は認めん。話は以上だ。」
そこからは話を受け付けてもらえず、サフィールはユーフェミアと数名のＳＰと共に河口湖コンベンションセンターホテルに向かうのであった。
河口湖までの移動は列車を利用して移動していた。
予約した部屋にサフィールとユーフェミアは向かい合うように座り、ＳＰは入り口と別室に待機していた。
「サフィも緊張してるんですか？」
「も？もて言うことはユフィ姉様も？」
「はい。私もこいうのは初めてで。」
「そうなんだ。ユフィ姉様も・・・」
自分と同じように初めてだと分かると少し安心していた。

「そういえばお姉様とは話をしたりしたの？」
「いや、総督の仕事の忙しいのか全然。」
「そうなの。」
ユーフェミアが顔を暗くしたのを見て、サフィールはどうにか話を変えなければと焦った。
「そ、そういえば姉様エリア11に来てから何か良いことあった？」
自分が来る前の事を聞いて話題を変えると、ユーフェミアは嬉しそうな表情に変わった。
「はい！友達ができたんです！」
「友達？どんな人ですか？」
それからは河口湖に向かう間、その友達の話で盛り上がった。

河口湖に到着したサフィール達は、少し休んだ後会議に参加した。
サフィールは会議の話を聞くことに手一杯で、ユーフェミアも同様であった。
会議は何事もなく進んでいた時、会議室に銃器を持ち深い緑色の軍服を着たイレヴンが入ってきた。
「全員動くな！」
それから会議室にいたメンバーとサフィールとユーフェミアは倉庫のような所に連れてこられた。
そこには観光客や学生も連れてこられていた。
全員集められたことを確認すると、日本刀を持った大柄の男が喋り出した。
「日本解放戦線の草壁である。我々は日本の独立のために起ち上がった。諸君らは軍属ではないがブリタニア人だ！我々を支配するものだ！」
ブリタニアという理由だけで関係も無い一般人を巻き込んだことにサフィールはふざけるなと思った。
「大人しくしていればよし！さもなくば容赦はしない！」
そう言って草壁は数人の見張りを残し立ち去ろうとする。
「待ってもらおうか？」

だが、サフィールが立ち上がり呼び止めた。
「(サフィ!)」
その行動にユーフェミアは驚き、他の人質も余計なことをするなと思った。
「何だ小僧?」
「私はサフィール・ヴィ・ブリタニアだ。」
「ブリタニア?まさか、皇族か!」
この中に皇族がいたことに日本解放戦線だけでなく観光客も驚いていた。
「人質には私がなる。だから他の人質は解放して欲しい。」
「・・・断る!」
サフィールは要求に草壁はハッキリと断った。
「な、何故だ?」
「貴様が本当に皇族だという証拠が無い限り認めるわけにはいかん!だが、貴様は我々についてきてもらう。」
確かにコーネリアやユーフェミアは報道などで顔は知られているが、サフィールに関しては報道されているわけではなく知られていない。
一人の解放戦線の兵士が近づいて銃を突きつけ、ついて来るように首を振る。
そして、サフィールは草壁たちについて行き、ユーフェミアは連れて行かれる弟を助けようと立ち上がろうとしたが、近くのSPが腕を掴んで止めた。

サフィールが草壁達に同行している一方、コーネリア率いるブリタニア軍は河口湖コンベンションセンターホテルを包囲していたが、未だにホテルに侵入することができなかった。
ホテルに繋がる橋はメイン以外は全て落とされ、上空および水中からに接近を試みるが全て失敗した。
残るのは地下トンネルのサザーランドを投入し、基礎ブロックを破壊しホテルを水没させるだけだった。

しかし、司令所に届いた報告は予想外のものだった。
「何！全滅だと！」
「どうやら敵はグラスゴーを改造したリニアカノンを配備している模様です。」
「突破は不可能ということか。」
「どうしますか要求通り政治犯の釈放を？」
「テロリストに弱味を見せるな！」
弱気になった参謀達をコーネリアは叱咤するが、状況は依然として変わらない。
「しかし、ユーフェミア様とサフィール様が？」
「っ！わかっている！」
参謀たちに聞こえないようにギルフォードが言うが、この中で二人を心配しているのがコーネリア自身であった。
まさかこんな事態になるとは思わず、こんな事なら立ち会わせなければと思うほどだ。
「その件はまだ気づかれていないはずです。」
コーネリアの心情を察してかダールトンは発言していた。
「人質の中にユーフェミア様とサフィール様いるのがわかれば、必ずや交渉に使ってくるかと。会議には立ち会うだけでしたからメンバーリストには入っていませんし」
だが、このままではいつかユーフェミアとサフィールに危害が及ぶ可能性があるため安心できなかった。

第６話

あれから状況は変わらず、気づけば夜になっていた。
サフィールは連れてこられた部屋で人質やユーフェミアの事を考えていた。
「こちらで調べさせてもらった。」
草壁が立ち上がりながら言いこちらに近づいてきた。
「確かに嘘はついていなかったようだな。」
「本当だとわかったなら人質を解放してくれ。」
本当だとわかった今ならと思い、もう一度人質を解放するよう要求する。
「残念だがそれは出来ない。」
「どうして何だ！」
銃を突き付けられながらも立ち上がり訪ねた。
「貴様らがブリタニア人だからだ！」
「それだけで！」
「それだけだと！貴様らのせいで我々は国だけでなくあらゆるものを奪われたんだ！」
「だからといって関係のない一般人を巻き込むな！」
お互いに一歩引くことが出来ずに叫んでいた。
「うるさい！貴様には色々と役だってもらう。」
そして、日本解放戦線は交渉に応じないコーネリアに対し、人質を突き落とすという暴挙に出た。
「我々の要求に対して何らかの返答がなされない限り、３０分ごとに一人ずつ飛んで貰う。人質の為にも誠意ある対応を期待する。なお、余計なことをすればこの者が次に飛んで貰うこと覚えておくように。」
そう言って映像にサフィールが映った。
「見せしめというわけですか、野蛮人め！」
解放戦線の暴挙にダールトンはそう吐き捨てた。
「サフィール殿下がすでに敵の手にあるのが痛いですね。」

ギルフォードはこの状況にどうすればいいか迷っていた。
「だからといってテロに屈するわけにはいかん！」
そう言うコーネリアだが異母弟の命がかかっており焦っていた。
「では強攻策を？」
「それではサフィール殿下の命を危険に晒してしまうのではないでしょうか？それにユーフェミア様の安全を確保しなければならないでしょう。」
「（ユフィ！サフィール！）」
どうしようも出来ない状況に焦っていると、焦った様子の兵士が近づいてきた。
「総督！ゼロが！ゼロから連絡が入りました！」
ゼロが現れたという報告にコーネリアは頭が痛くなってきた。
とはいえここで考えている暇もなく、コーネリアは格納庫に向かいギルフォードとダールトンは追従した。

ゼロがコーネリアに接触していた頃、サフィールは人質を突き落とすという暴挙に怒りが込み上がっていた。
「こんなことが、こんなことが貴方達のやり方なんですか！」
立ち上がったサフィールに兵士達は銃を突きつけるが、今のサフィールには眼中にはなかった。
「こんな事だと？」
「そうだ！関係もない一般人の命をなんとも思わないのか！」
サフィールの言葉に草壁は持っていた日本刀を叩きつけた。
「ぐっ！」
「貴様に一体何がわかる！貴様等こそ多くの同胞の命を奪っておいて！」
再び日本刀を叩きつけおうとした時、一人の解放戦線の兵士が草壁に何か耳打ちした。
「何！ゼロが・・・」
「ゼロ？」
ゼロがここ来ているのかと思い、まさか解放戦線と手を組みにきた

のかと最悪の未来を考えてしまった。
「ふんっ!命拾いしたな!」
草壁は兵士に目配せすると兵士はサフィールを立ち上がらせた。
「こっちだ。」
サフィールを立ち上がらせると、別の部屋に移動するように言った。
部屋を出て別室に向かう途中、サフィールは黒い仮面をつけた人物を捉えた。
「ゼロ・・・」
ゼロもこちらを捉えるが、つけている仮面のせいでどんな表情をしているかわからなかった。
「・・・・・・サフィール」
「えっ?」
ゼロが自分の名前を呼んだように聞こえサフィールは驚いていた。
草壁達ですら調べるまでわからなかったのに、ゼロが自分を知っていることに困惑していた。
そして、部屋の中に入れられ、扉を一人の兵士が見張っていた。
しばらくすると突然銃声が聞こえてきた。
見張りは銃声の確認に急いで向かった。
「今なら。」
扉を開けて辺りに誰もいないことを確認すると部屋を出た。
草壁達がいた部屋向かう途中、黒を基調とした制服の集団を見つけ急いで隠れた。
「あれは?」
「こっちの爆薬の設置は完了したぜ。」
「なら、ゼロの指示通りに移動するぞ。」
ゼロの指示という言葉に彼等はゼロの部下と考えた。
彼等が何処かに移動したのを確認し、サフィールも移動を再開した。
移動中サフィールはあることに気づいた。
「解放戦線の兵士がいない?」

巡回の兵士がいない事におかしいと思った。
注意しながら移動し、目的の部屋が見えてきた。
「これは・・・一体？」
扉の前には解放戦線の兵士が両手を挙げて組んでいた。
兵士達が何処かに移動し、誰もいない事を確認すると部屋から声が聞こえてきた。
「そう、クロヴィスが死んだからですね。私が殺した。」
「ゼロ？」
部屋の中にゼロがいるのはわかったが誰と話しているのかが気になった。
「彼は最後まで私におもねり命乞いをした。」
ゼロはクロヴィスを殺した時の事を淡々と話していた。
「イレヴンを殺せと言ったその口で。」
「だから兄を殺したんですか？」
「（ユフィ姉様！）」
ゼロと話している人物がユーフェミアだと分かるとサフィールは焦り出した。
「いや。」
「では、なぜ？」
「あの男がブリタニア皇帝の子供だから。」
「（何で・・・父上が？）」
ゼロがクロヴィスを殺した理由が皇帝の息子だからという事に、ゼロの考えがわからなかった。
「そういえば、貴女もそうでしたね？」
嫌な予感がしサフィールは部屋に飛び込んだ。
「ユフィ姉様！」
「サフィ！」
突然飛び込んできたサフィールに驚きながらも、無事であることにユーフェミアは安堵した。
「っ！お前は！」
ゼロも飛び込んできたサフィールに驚いていた。

「ゼロ！貴方には聞きたいことがある！」
銃を構えるゼロの前に立ち、何故自分のこと知っているのか聞くつもりでいた。
「こちらから話すことはもうないものでね。」
銃を下げどういう事だと思うと、ホテルが突然揺れだした。
「うわっ！」
突然の揺れにサフィールは倒れそうになった。
だが、倒れそうになったサフィールを誰かが支えていた。
見上げると支えていたのはゼロだった。
支えているのがゼロだとわかると、サフィールは急いでゼロから飛び退いた。
「さて、死にたくなければ私の指示に従ってもらおう。」
「・・・わかった。」
本来ならテロリストの指示に従うつもりはないが、自分ではどうすることもできないため従うことにした。
それから先ほど見かけた黒い制服を着たイレヴンに誘導され、他の人質達と一緒にボートに乗せられた。
「ゼロは一体何を企んでるんだ？」
ゼロの考えが分からずに困惑していた。
「ブリタニア人よ、動じることはない。」
「一体何を始めるんだ、ゼロ？」
「ホテルに囚われていた人質は全員救出した。貴方方の元にお返ししよう。」
「よく言う。」
もし、ゼロを捕らえようとすれば自分達は人質に逆戻りするだろう。
そして、サーチライトがゼロを照らし出した時、サフィールが見た黒い制服を着たイレヴン達が整列し照らし出していた。
「人々よ！我らを畏れ、求めるがいい！我らの名は黒の騎士団！」
「黒の・・・騎士団？」
「我ら黒の騎士団は武器を持たない全ての者の味方である！イレヴン

だろうとブリタニア人であろうとも！」
　ゼロ達を照らすサーチライトがスポットライトのようになっており、ゼロの演説は続いていく。
「日本解放戦線は卑劣にもブリタニアの民間人を人質に取り無残に殺害した。これは無意味な行為だ、故に我々が彼等に制裁を下した。」
　まるで正義の味方のようにゼロは語っていた。
「クロヴィス前総督も同じだ。武器を持たぬイレヴンの虐殺を命じた。このような行為を見逃すわけにはいかない、故に私は彼に制裁を加えたのだ。」
　クロヴィスを殺した事を美化しているように言っているが、サフィールは理由がそれだけじゃない事をあの場で聞いていた。
「私は戦いを否定しない。だからといって、強者が弱者を一方的に殺すことを断じて許さない！撃っていいのは撃たれる覚悟がある奴だけだ！」
　ゼロの演説はまるで劇のように語っていた。
「我々は力ある者が力無き者を襲う時に再び現れるだろう。たとえその敵がどれだけの力を持っていたとしても。」
　この演説はブリタニアへの宣戦布告のようにサフィールは捉えてた。
　ブリタニアが力無き者を襲えば自分達が牙を剥くと。
「力ある者よ、我を畏れよ！力無き者よ、我を求めよ！世界は我々黒の騎士団が裁く！」
　ゼロの演説が終わると、船はブリタニア軍が包囲してる中悠々と進み黒の騎士団は逃げ延びた。
　その後、サフィールやユーフェミアや人質は軍に無事に保護された。
　純血派のメンバーも来ており、とても心配された。
　特にジェレミアなんかは無事であったことが分かると凄く号泣していた。
　それをヴィレッタと二人で宥めるのに大変だった。
「（それにしても、あの時。）」

ジェレミアを宥める中、ゼロに支えられた時を思い出す。
「(何故かとても懐かしいように感じた。)」
ゼロに体を支えられた時の感覚が、まるで昔誰かに支えられた時と同じように思えた。
「(そんな訳ないか。)」
色々あって疲れているんだと思い、ある考えを否定した。

第7話

河口湖の一件以降、ゼロが組織した黒の騎士団は言葉通り「弱者の味方」として行動していた。

民間人を巻き込んだテロリストや横暴な軍人、汚職政治家や営利組織などに対して正義の制裁を下し、イレヴンの支持を着実に増やしていた。

そんな中サフィールは、ユーフェミアと共にコーネリアの見送りに来ていた。

「エルアライン戦線ではＥＵが攻勢に出ている。我々としてもいつまでもこのエリア１１に留まっているわけにはいかない。」

Ｅ．Ｕ．ーーユーロピア共和国連合、ヨーロッパとアフリカを領土とするブリタニアに並ぶ国である。

「内政を固めて衛生エリアに昇格させたい。そのためにもテロリストの撲滅は急務だが、イレヴンの間に蔓延している薬物、リフレインの問題も深刻だ。お陰で生産性が落ちている。」

リフレインとはイレヴンの間で蔓延している薬物だ。

かつて幸福だった頃にトリップできる薬物で依存性が強く、多くのイレヴンがこのリフレインを使用している。

「ここで中華連邦の九州ルートを叩いておかなければならん。わかるな？」

持ち込まれているリフレインは中華連邦から流れており、このままではエリア１１の生産性が低下してしまう。

「はい、お気をつけて。」

「武運をお祈りします。」

「お前こそもう租界から出るなよ。サフィールもあまり無茶をするなよ。」

「お姉様、黒の騎士団のことは？」

黒の騎士団の事を聞くユーフェミアの瞳には不安の色が見えた。

「もう少し泳がせてやるさ。お前達を救ってくれた借りある。だが、戻ってきたら・・・」

そう言うとコーネリアの瞳は冷たくなった。
そして、不安そうにしているユーフェミアの頬に手を置いた。
「このエリアは綺麗に掃除してからお前に渡す。だから、危ないことは考えるな。な、ユフィ?」
それでもユーフェミアは不安そうにしていた。
「サフィールも同じだ。もう危険なことはするなよ。」
「はい、心配かけてごめんなさい姉様。」
「それでは行ってくる。」
コーネリアは参謀を連れ、軍用列車に乗り込んだ。
軍用列車は出発しどんどん見えなくなってきた。
「ユフィ姉様、もしかして・・・ゼロのこと?」
自分が考えていた事を当てられ驚いた表情になっていった。
「うん。気になることがあって。」
「もし出来ることがあったら相談して。」
「ありがとうサフィ。でも、大丈夫。心配かけてごめんね。」
ユーフェミアはそう言うがサフィールはそれでも心配だったが、これ以上聞くべきなのかわからず聞けなかった。
それから時間が経ち、サフィールはある場所に向かっていた。
「ここかな?」
サフィールの目の前には一台のトレーラーがあった。
「あら?どうかしたの?」
トレーラーを見ているサフィールに女性士官が近づいてきた。
「すいません、ここが特別派遣嚮導技術部で合ってますか?」
「はい。そうですけど・・・君は?」
「申し遅れました。純血派の指揮官を務めているサフィールと申します。」
「サフィール?も、もしかしてサフィール・・・殿下ですか?」
名乗りを聞いた女性の顔色が変わり始めた。
「はい、そうですよ。」
「も、申し訳ありませんサフィール殿下!」
肯定すると女性は謝り出した。

「そ、そんな頭を下げないでください。」
「ですが？」
それでも相手は皇族であるため気が気でないのだろう。
「今回ここに来たのはお礼を言うためなんです。」
「お礼・・・ですか？」
「はい。河口湖では危険な任務だったのに受け入れてくれたそうですし、そのお礼を。」
「な、なら中でお待ちになりますか？」
「はい。それとあの白いＫＭＦも見てみたくて。」
「は、はぁ。」
それから女性ーセシルさんに案内されてトレーラーの中に入ると、眼鏡をかけた白衣の男性がプリンを食べていた。
「あれ、セシル君誰その人？」
「ろ、ロイドさん！この方はサフィール殿下ですよ！」
「サフィール？あ～純血派の指揮官の人だっけ。」
「ロイドさん！」
皇族を目の前にしているの呑気にしているロイドと言われる男性をセシルは叱っていた。
「いいですよセシルさん。初めましてサフィールです。」
「初めましてロイド・アスプルンドです。」
お互いに自己紹介を終えると、急いで用意したのかセシルがコーヒーを渡してきた。
「あ、ありがとうございます。」
コーヒーを受け取り一口飲み、様子を伺っているセシルに笑顔を見せた。
「美味しいです、ありがとうございます。」
その言葉にセシルはホッとした表情になっていた。
「それで、殿下は一体何をしにきたんですか？」
「実は河口湖でのお礼とそちらが開発したＫＭＦを一目見ようと。」
「ふーん。セシル君それでスザク君は？」
「まだ来ていないようです。」

どうやらパイロットはまだ来ていないようだ。
「それじゃ殿下、スザク君がまだ来ていないから先にランスロット見ます？」
「ランスロット？」
ロイドが背後を指差すと、そこには白いＫＭＦ－ランスロットが格納されていた。
「これが我々特派が開発した世界で唯一の第７世代ＫＭＦランスロットです。どうですか殿下？」
「何て言うかサザーランドやグロースターに比べるとカッコいいですね。」
「このランスロットに使用されているサクラダイトはサザーランドの数倍は使っている上に、ファクトスフィアも２基搭載してるんですよ。それで他には」
ロイドはランスロットについて説明し始め、聞いているサフィールは途中からよく分からなくなってきた。
「ロイドさん！」
「ん？何セシル君？」
「殿下が困ってるじゃないですか！」
「そう？まだそんなに説明したわけじゃないんだけどな。」
ロイドはまだ説明したりないのか不貞腐れているが、聞いていたサフィールは止まる様子のない説明にこのまま延々と続くのかと思ってしまうほどだった。
ロイドを止めてくれたセシルには本当に感謝している。
「ありがとうございますセシルさん。」
「大丈夫ですか殿下？」
「あはは、大丈夫です。」
どうにか笑って大丈夫であることを見せる。
「あれ、誰か来てるんですか？」
すると学生服を着たイレヴンの少年が入ってきた。
「おめでとう～スザク君。君にお客様だよ。」
「僕に？」

「君がランスロットのパイロットの枢木スザク？」
「はい。貴方は？」
「初めまして純血派の指揮官を務めているサフィールです。」
サフィールの名乗りを聞くと、スザクは慌てて片膝をついた。
「も、申し訳ありませんサフィール殿下。」
「そんな畏まらなくていいですよ。」
「ですが、自分は。」
スザクは自分はイレヴンだからと言いたいのだろう。
「私はお礼を言いにきたんです。」
「お礼？」
「はい。河口湖では危険な任務だったのにありがとうございます。」
「いえ、自分は当然のことをしただけです。」
スザクは今も片膝をつきながら言いい、サフィールはどうすればと思った。
「ええと、スザクと呼んでいいですか。」
「自分にそう畏る必要はありません。」
「それではスザク、友達になってくれますか？」
そう言うとスザクは驚いた表情になった。
「自分の様なものが殿下の友人になるなんて。」
「副総督とは友達になったのに？」
「そ、それは・・・」
スザクとユーフェミアが友人であることは河口湖に向かっている時に、ユーフェミアから聞いていたのである。
「だから、私と友達なってくれますか。」
サフィールは片膝をつくスザクに手を差し出した。
「・・・・・自分でよければ。」
スザクはサフィールの手を掴み、サフィールはその手を引っ張り立ち上がらせた。
この日サフィールはこのエリア11で初めての友人ができた。
それからはスザクや特派の人達と雑談し、楽しい日であった。

第8話

「話・・・ですか？」
「はい。できればあまり人目につかない所で。」
純血派の執務室で戦術論の教本を読んでいたサフィールに、ジェレミアとヴィレッタの二人から話したいことがあるそうだ。
「わかりました。場所はどうしましょう。」
「場所はこちらで用意してます。」
そして、二人に案内され資料室に案内された。
「こんな所で申し訳ありません。」
「いえ、構いません。それで話とは？」
「はい。殿下には以前話した枢木スザク強奪事件で、私の記憶が喪失していたことを話したことは覚えていますか？」
「はい。それが何か？」
ジェレミアがヴィレッタに頷くと今度はヴィレッタから話があるようだ。
「殿下、実は私もジェレミア卿と同じように記憶の喪失を経験しているんです。」
「それは何時頃ですか？」
「シンジュク事変の時です。」
「詳しい話を。」
「シンジュク事変の時、私はゲットーの廃墟で銃声が聞こえ行ってみると、我が軍の兵士の死体と学生服の少年を発見しました。」
「学生ですか？」
「はい。あの制服は確か、私立アッシュフォード学園の制服でした。」
「アッシュフォード学園・・・」
アッシュフォード学園の制服はスザクに会いに行った時に着ていた制服だ。
「その少年と会ったところまでは覚えているんですが、それ以降の記憶が無く気づけばサザーランドを奪われていました。」
ヴィレッタの話を聞けば聞くほど、ジェレミアの記憶の喪失と酷似

していた。
「これが本当ならその学生服の少年がゼロの可能性が高いですね。」
「やはり殿下もそうお考えなられますか。」
「その学生服の少年の顔は覚えていますか?」
その少年の顔さえ分かれば、少年がゼロなのか直ぐにでも調べることができる。
「申し訳ありません。その少年の顔は思い出すことができませんでした。」
ヴィレッタはそうに言い、その表情はとても残念そうだった。
「ちなみこの話を知っているのは?」
「我々の他にディートハルト・リートという報道屋にその少年を調べるように頼んでるのでこの四人だけかと。」
「わかりました。ゼロの事も大切ですが、今はナリタ連山での作戦に集中しましょう。」
コーネリアはナリタ連山が日本解放戦線の本拠地である情報を掴んだため、近日このナリタ連山に軍を率いて向かう予定だ。
当然純血派もこの作戦に加わるつもりだ。
「イエス・ユア・ハイネス」

そして、ついにコーネリアは軍を率いてナリタ連山に向かい始めた。
サフィールは旗艦であるG1ベースでダールトンが説明する作戦概要を聞いていた。
「この地域に日本解放戦線の本拠地があるのは確実です。」
画面が変わりナリタ連山の地形が表示される。
「すでに四個大隊を七つに分け伏せています。あとは総督の合図を待って一気に包囲もを狭め殲滅します。」
「包囲網の外側から敵が現れることはないのでしょうか?」
作戦の説明が終わり、ユーフェミアが疑問に思ったのか聞いてきた。
「ゼロか?」

「ご安心ください。作戦開始と同時に周辺道路及び山道を封鎖します。」
「友軍もある下手に姿を表せばその時がゼロの最期となろう。」
「お言葉ですが総督、ゼロは侮らないほうがよろしいかと。」
サフィールがコーネリアに向かってそう言うと、この場にいる者の視線がサフィールに集まる。
「それはどういう意味だサフィール？」
「ゼロはこれまでとは違い力を着実につけています。サイタマの時とは違い侮らない方がよろしいかと。」
「お前は私がゼロに負けるとでも。」
コーネリアの視線は鋭く、サフィールは怖気付くことなく言う。
「思いませんがこの国のことわざに窮鼠猫を噛むという言葉があります。」
「ほう？」
「どれだけ弱い者でも強き者に牙をむく。敵を侮れば手痛いしっぺ返しを食らう可能性もあります。」
その言葉にコーネリアは感心するような表情になった。
「確かにお前の言う通り敵を侮ればこちらも無傷にはいかないだろう。それでも我々は敵に屈するわけにはいかん。わかるなサフィール？」
「はい。不躾なことを言い申し訳ありません。」
「構わぬ。そのように考えることも大切だが弱気するのもどうかと思うぞ。」
「はい。」

それからサフィールはグロースターに乗り込んで発進し、ジェレミア達と合流した。
各部隊の配置が進む中、今回の作戦に限って純血派は後方部隊として配置された。
「殿下なぜ我々は後方なのでしょう？」
「すみません。私も詳しいことは聞かされておらず。」

何故サフィールの部隊が後方に配置されたのは、河口湖の件で無茶をさせない為というコーネリアの考えがあったためだ。
『全軍作戦開始!』
コーネリアの合図が来て各方面に展開していた部隊が行動を開始した。
そこからは圧倒的としか言えなかった。
解放戦線はこのナリタ連山を要塞化し、迎撃にグラスゴーをコピーして生産した無頼を出撃させているが悉く撃破されていった。
徐々に包囲は狭まっていき、ダールトンが担当する戦域から信号弾が上がった。
「どうやら決着はついたというところか。」
敵本拠地に通じる入り口を発見したようだ。
『予備部隊は直ちにダールトン将軍の下に移動せよ。繰り返す予備部隊はダールトン将軍の下に直ちに移動せよ。』
やっと出番が来たようだ。
『サフィール殿下の部隊はそのまま待機してください。』
ところがサフィール達だけそのまま待機するよう命令された。
「すみません。何故、我々だけ待機なんですか?」
『そ、それが総督から命令されて・・・』
少し怒り気味に言うと、相手のオペレーターは焦りながら言った
「はぁ、わかりました。」
オペレーターに当たっても仕方なく待機することにした。
するとナリタ連山が揺れだした。
「なっ!これは一体!?」
「殿下あれを!」
ジェレミアが示す方に視線を移すと、山崩れが起き日本解放戦線やブリタニア軍は巻き込まれていく。
「あれではダールトン将軍とアレックス将軍の部隊が!」
キューエルの言う通り山崩れはダールトンとアレックスがいる場所を通過している。
山崩れが麓まで行き、戦力は大幅に減少していた。

この山崩れによって各部隊が混乱する中、サフィールは地形図を確認した。
「この状況・・・総督の部隊が孤立している。それにこれは日本解放戦線がやったとは思えない。」
この山崩れを起こした人物がサフィールは一体誰なのかわかった。
「各機！我々はこれより総督と合流する！この状況を作り出したのは・・・ゼロだ！」
「しかし我々は待機を命じられてます！」
ヴィレッタが止めようとするが命令どころではない。
「総督を失うわけにはいきません！」
そこへ味方から通信がきた。
『カリウス隊が新たな機影を確認！敵は日本解放戦線ではありません！敵は・・・黒の騎士団です！』
「ゼロだ！よくぞ現れてくれた！ゼロぉぉぉ！」
敵がゼロだとわかるとジェレミアは単騎でゼロに向かってしまった。
この行動にサフィールは頭が痛くなった。
優秀なパイロットであるが、ゼロが関わると暴走してしまう。
「ああもう！ジェレミア卿の後を追います！」
「イエス・ユア・ハイネス！」
サフィールはすぐさまジェレミアの後を追い、ヴィレッタやキューエルなど他の純血派のメンバーも従ってくれた。
向かう途中黒の騎士団と交戦していたカリウス隊のシグナルがＬＯＳＴした。
「カリウス隊が全滅だと！」
やはりサイタマの時とは違い、力をつけたゼロがブリタニアに牙をむいた。
「ジェレミア卿！」
「なっ！殿下ここは危険です！お下がりを！」
サフィールが来たことに気づき慌てて下がるように言ってきた。
「ゼロをここで止めなければ総督が危険なんです！」

そう言いレーダーを確認すると、所属不明の機体を発見した。
「ゼロ！」
サフィールはアサルトライフルを構え、無頼に先制攻撃した。
アサルトライフルの弾丸は一機の無頼の脚に命中し、これ以上の戦闘は不可能でパイロットは脱出した模様だ。
状況は違うが再びサフィールはゼロと相対したのである。

第9話

サフィール率いる純血派とゼロ率いる黒の騎士団が相対する中、サフィールはあることに気づいた。
「(敵は・・・グラスゴーもどきだけ?)」
これだけの戦力だけでゼロが戦いに臨むわけがないと思いサフィールは警戒していた。
「ゼロはいるのか?いるのならこのジェレミア・ゴッドバルトと戦え!」
そんな中ジェレミアがグラスゴーもどきの中にいるゼロを呼び出していた。
『ほぉ・・・久しぶりですね。まだ軍におられたとは驚きました。ですが、今貴方ごときに構ってられる時間は無いんですよ、オレンジ君。』
ゼロはツノ付きのグラスゴーもどきに乗っているようで、ツノ付きのグラスゴーからの明らかな挑発にサフィールはいけないと思った。
「オ、オオ、オレンジだとぉ!死いぃぃねぇぇえ!」
挑発に乗ってしまったジェレミアはアサルトライフルを構えながらゼロへと突撃する。
突撃してくるジェレミアに何もしないゼロに何かあると思い、ジェレミアを止めようとすると紅い何かがアサルトライフルを弾き飛ばした。
「ぬおっ!」
アサルトライフルを弾き飛ばされたジェレミアはすぐさまスタントンファを展開して構えた。
そして、アサルトライフルを弾いた紅いＫＭＦはゼロの前に立ち、短剣を構えて立ち塞がった。
「ジェレミア卿!」
「手を出すな!これは私の決闘だ!」
ヴィレッタが援護のために声をかけるが、ジェレミアは援護は不要と断った。
「それは認められませんジェレミア卿!」

グラスゴーもどきとは違う、これまでのデータにないＫＭＦにサフィールは援護が必要だと考えていた。
「ご安心を殿下。イレヴンごときが操るＫＭＦに負けるなどありえません！」
自信満々に言うジェレミアだが、それでもサフィールには不安があった。
「ですが、ジェレミア卿あのＫＭＦはデータにありません！まさかイレヴンが？」
ヴィレッタもサフィールと同じでデータにないあの紅いＫＭＦを警戒していた。
「イレヴン風情にそんな技術があるものか！」
そう決めつけたジェレミアは殴りかかるが、紅いＫＭＦは回避し飛び上がった。
「は、速い！」
飛び上がった紅いＫＭＦは短剣を振り下ろし、ジェレミアはスタントファで防御しお互い鍔迫り合いの状態になった。
その機体の性能を目の当たりにしたサフィールはこれがゼロの切り札なのかと見ていると、紅いＫＭＦは異様に目立つ右腕でジェレミアのサザーランドを掴みかかってきた。
当然この右腕を警戒していたジェレミアは後ろに下がるが、腕が僅かだけ伸びサザーランドの頭部を掴んだ。
「いけない！」
サフィールは急いでジェレミアを助けようした途端、掴んだ掌から紅い光が発生した。
そして、掴まれていたサザーランドは内側から膨張し始めた。
頭部を掴まれているためパージできず、ついにはコックピットまで膨張してきた。
「ジェレミア卿急いで脱出を！」
「しかしゼロが！目の前にゼロがいるというに！ゼロぉぉぉぉ！」
サフィールは脱出するように言うが、それでもゼロへの執着が強く脱出を拒んでいた。

「ジェレミア！脱出するんだ！」
サフィールの声に合わせるように緊急脱出装置が作動し、コックピットは何処かへと飛んでいき残ったサザーランドは爆散した。
「そんな・・・ジェレミアが・・・」
サフィールは目の前で起きたことが信じられなかった。
ジェレミアのパイロットとしての腕前は知っており、コーネリアの親衛隊にも劣らない実力を持っている。
そんな彼がこうもあっさりやられたことに、サフィールだけでなくヴィレッタやキューエルも信じられなかった。
「各機は弾幕を張って黒の騎士団の足止めを。キューエル卿はあの紅いＫＭＦの情報を総督に伝えた後は護衛を！」
それでも指揮官であるサフィールはこの状況でも最善の行動を取らなければいけない。
そのためにはあの紅いＫＭＦの情報をコーネリアに伝えなければいけない。
「イ、イエス、ユア・ハイネス！」
呆然としていた純血派のメンバーも急いで命令通りに弾幕を張り、キューエルのサザーランドは後退し始めるが、紅いＫＭＦは弾幕をかいくぐってキューエルのサザーランドの前に出てあの右腕で掴んだ。
そして、右腕からまた赤い光が発生しキューエルは脱出しようとするが、コックピットを掴まれているため脱出は不可能だった。
「この私がイレヴン如きに、この私が！」
その言葉がキューエルの最期の言葉だった。
「くそっ！」
また一人大切な部下がやられたことに憤る気持ちが大きくなったが、それでも今は目の前敵に集中しなければならない。
「殿下！紅い奴が移動を開始しました！」
ヴィレッタの言う通りに紅いＫＭＦは何処かへ移動を開始した。
「あの紅い奴がこの状況で移動？」
正直あの性能なら自分達を撃墜するぐらい簡単のはずが、ここで移動することに底知れぬ不安がでてきた。

「・・・私は紅い奴を追います。以後の指揮はヴィレッタ卿、お願いできますか？」
「そんな危険です殿下！」
「すみません、頼みます！」
当然のようにヴィレッタは止めるが、今は時間が惜しいため後を頼むことにした。
「紅い奴は・・・ポイント９？何でここに？」
進路を予測してみるとそこは挟み撃ちにはうってつけにポイントであるが、何故ここに向かうのかがわからなかった。
そのままポイント９に向かうサフィールはこのポイントに向かう味方の信号を確認した。
「この信号は・・・総督の？まさか！」
あの紅いＫＭＦがポイント９に向かった理由がわかり、サフィールは急いでポイント９向かった。
そして、ポイント９に到着したサフィールが目にしたのは、両腕を破壊されたコーネリア専用のグロースターとあの紅いＫＭＦ。
それを見下ろすようにいる一機のツノ付きのグラスゴーもどきと二機のグラスゴーもどきだった。

第１０話

ポイント９に到着したサフィールはすぐさまコーネリアを助けるために、紅いＫＭＦに向かってアサルトライフルを撃ちながら突貫した。

「うぉおおお！」

こちらに気づいた紅いＫＭＦは撃ってくる弾丸を全て避け、少しだけ後ろに下がり距離をとった。

「まさか、サフィールなのか？」

「無事ですか姉様！」

コーネリアのグロースターを庇うように前に出た。

「何をしてるんだ馬鹿者！」

「なっ！」

助けに来て叱責されたことにサフィールは驚いていた。

「何故来たんだ？」

「フフッ。」

「どうして笑う？」

何故という言葉にサフィールはおかしく笑ってしまった。

「大切な家族を助けることに理由が要りますか？」

サフィールの言葉にコーネリアは言葉を失った。

「全く飛んだ馬鹿者だ。」

そう言いながらもコーネリアは嬉しそうであった。

「（とはいえあの紅い奴がいる限りは・・・）」

威勢良く言ったものの、紅いＫＭＦと自分の腕前では到底勝つ事は出来ないためサフィールは内心焦っていた。

一方、ゼロことルルーシュは驚くと同時に喜んでいた。

「まさかあいつが来るとはな。」

こちらに向かってくるグロースターを確認してまさか親衛隊かと思ったが、そのグロースターは親衛隊の機体ではなく純血派の中にいたグロースターだった。

当然、その機体に乗っているパイロットもすぐに見当はついた。

「サフィール・・・」
ナナリーと同じように自分にとって大切な弟だ。
ルルーシュはサフィールをどうにかして自分の手元に置きたいと考えていたが、サフィールがブリタニア側に立っている限りそう簡単にはいかないと考えていた。
だが、今の状況ならコーネリアと一緒に捕らえることが出来るかもしれない。
いや出来るとルルーシュは確信していた。
「ゼロどうしますか?」
紅蓮弐式のパイロットである紅月カレンから指示を求められ、意識を目の前の状況に向ける。
「カレン、あのグロースターも破壊せずに鹵獲しろ。」
「えっ!ですが?」
「何か不満が?」
「い、いえわかりました。」
もう一機のグロースターを鹵獲する理由わからないカレンにどうにか納得してもらい、これで自分の勝利は確定だと思いルルーシュは笑みを浮かべていた。

短剣を構えた紅蓮が動き出し、サフィールはアサルトライフルで迎撃するも弾丸はカスリもしなかった。
「くっ!」
一瞬で接近した紅蓮は短剣でアサルトライフルを弾き飛ばし、サフィールはすぐさま片手に持っているランスでなぎ払おうとするもあの右腕に掴まれてしまった。
「やばい!」
咄嗟にランスを手放し距離を取ろうとしたが、紅蓮はコックピットに短剣を突きつけていた。
「さて君にも投降してもらおうかサフィール?」
上からゼロがコーネリアと同じように降伏勧告してきた。
「くそっ!」

やはり自分ではこの状況を覆すことは出来ないことに歯がゆい気持ちだった時、突然地面が揺れだした。
「これは？」
突然の揺れに驚いていると何かが近くの壁を破壊し、土煙が溢れる中白いＫＭＦランスロットが颯爽と現れた。
「ランスロット！スザクなのか！」
「総督！サフィール殿下無事ですか！救援に参りました！」
「特派だと！誰の許しで？」
「もしかして・・・ユフィ姉様？」
参謀たちでは絶対にスザクに出撃許可を出すとは思えず、友人であるユーフェミアが許可したとしか思えない。
一方、現れたランスロットを見たルルーシュは憤っていた。
「ええい！あと一歩のところを！」
状況は確実にこちらの勝利であったが、目の前に現れたランスロットによってそれが狂わされたである。
「紅蓮弐式は白兜を破壊しろ！こいつの突破力は邪魔だ！」
「はい！」
指示を受けたカレンもシンジュクでの借りを返すため燃えていた。
ランスロットは向かってくる紅蓮を蹴りつけるが、紅蓮は右腕でサンドボードを掴み輻射波動を照射した。
スザクは膨張するサンドボードを見てすぐさまサンドボードをパージした。
「そちらは任せた！こちらはゼロを叩く！いくぞサフィール！」
「はい！」
自分達では紅蓮をどうすることもできないので、スザクに紅蓮を抑えてもらいサフィール達はゼロを叩くことにした。
コーネリアはスラッシュハーケンで攻撃し、サフィールは手放したランスを拾い突貫した。
ゼロ達は弾幕を張りながら後退していくが、コーネリアは軽々と避けサフィールはランスを盾にしながら接近していく。
「はぁぁぁ！」

サフィールはゼロの無頼にランスを振り下ろし、ゼロはギリギリ回避するが左腕を破損してしまった。
少しずつゼロを追い詰める中、ランスロットと紅蓮の戦いは紅蓮が崖から落ちたことで中断された。
二機の無頼は紅蓮の後を追って崖を降り、ゼロはスラッシュハーケンを崖に向かって撃って崖を登り後退し始めた。
そして、コーネリアのグロースターが膝をつきサフィールはすぐに近くに寄る。
「姉様、大丈夫ですか?」
「心配するなエナジーフィラーが尽きただけだ。」
「総督!」
スザクのランスロットも近くに寄ってきた。
「お前はゼロを追え!」
「しかし・・・」
「エナジーフィラーが尽きただけだ!行け!」
「はい!」
ランスロットは飛び上がってゼロの後を追い始めた。
それを見送るサフィールは弾かれたアサルトライフルを拾うと、崖にスラッシュハーケンを打ち崖を登り始めた。
「何をしているサフィール!」
「すいません姉様!ゼロには聞きたいことがあるんです!」
コーネリアの制止の声を聞かずにサフィールはゼロの後を追い始めた。

ランスロットが向かった方向に進んでいくと、そこにはヴァリスを構えるランスロットとそのランスロットに触れる緑色の髪の少女とゼロがいた。
「あの少女は一体?」
緑色の髪の少女が一体何者なのかと考えていると、ランスロットがヴァリスを乱射し始めた。
「スザク!」

どう見ても正気じゃないスザクに驚いていると、乱射しているヴァリスの銃口ががこちらに向いた。
「えっ？」
ヴァリスはこちらに向かって撃たれ、グロースターの右脚に命中した。
「スザク・・・そんな！」
スザクが自分を撃ったことを信じられず、右脚を撃たれたグロースターは前へと崩れ落ち倒れた。
「うぁっ！」
そして、サフィールは機体を支えることを忘れたせいで、モニターに頭をぶつけてしまい気絶してしまった。

近くで倒れるグロースターを見つけたルルーシュは意識を失ったC．C．を抱え、急いで駆け寄った。
C．C．にショックイメージを見せられていた白兜は乱射した後、何処かに行き今はこの場にいない。
ルルーシュはグロースターのコックピットを開くと、そこには頭を打ったのか気絶しているサフィールがいた。
「サフィール！」
気絶しているサフィールの肩を掴んで呼ぶが目覚める気配がない。
「くそっ！」
それからルルーシュは力を振り絞って二人を近くの洞窟に運び込んだ。

ルルーシュが二人を洞窟に運び込んでいる頃、撤退したブリタニア軍は慌ただしかった。
ゼロを追ったサフィールが行方不明になったのだ。
「サフィールはまだ見つからないのか？」
「はい。全力で捜索しているのですが、人手が足りなく未だに発見出来ず。」
「ちっ！」

あの時の山崩れやその後の戦闘により多くの将兵が亡くなり、今では怪我人の手当や生存者の確認など人手が足りない状況である。
「やはりあの時止めるべきだったか。」
無理矢理にでも止めることができたらと考えてもすでに遅い話である。
それでも自分も危険だったにも関わらず助けに来た時、内心嬉しくコーネリアは感じていた。
「必ず、必ずお前を見つけるからな・・・サフィ。」
だから、何が何でも大切な弟を見つけ出すと決意した。

「(ここ・・・は?)」
少し寒く感じコックピットの中ではなく外にいることがわかった。
「(誰か・・・いる?)」
話し声が聞こえ薄っすらと目を開けると、サフィールの目に映ったのは亡くなったと思われる兄の面影がある思わしき少年の顔だった。
「兄・・・様?」
「気がついたのかサフィール!」
サフィールの声に反応してルルーシュは近づき、意識を戻したサフィールは目の前にいる人物がルルーシュだと気づくと彼に抱きついた。
「兄様!生きてた!兄様~!」
生きていることが嬉しいのかサフィールは泣き出した。
その様子にルルーシュは相変わらずだと思い、C.C.は兄と同じようにとんだブラコンだなと思った。
しばらく泣いた後、サフィールはルルーシュの服装を見てあることに気づいた。
「もしかして、兄様が・・・ゼロ・・・なの?」
流石にこの状況では隠し切れない、いやあの力を使えば隠し通せられるが大切な弟には使いたくはなかった。
「ああそうだ。俺がゼロだ。」

あっさりと認める兄にサフィールは何を言えばいいかわからなかった。
「どうして？」
「ん？」
「どうして兄様は戦うの？」
「どうして・・・か。」
サフィールには兄が戦う理由がわからなかった。
「それを聞いてどうする？」
「僕は・・・それが正しいのか見極めたい。」
サフィールは兄がやろうとしていることが正しいのか見極めると同時に、ルルーシュと離れ離れになりたくなかった。
はっきりと言う弟に自分が見ない間に成長したことに嬉しく思った。
「なら俺についてくるのか？」
「うん。」
何の問題なく頷く弟にルルーシュはやれやれと呆れていた。
「お前、皇族が簡単にテロリストになるって言うか。」
「でも、それを言うなら兄様もでしょ。」
サフィールの言う通りでありルルーシュは何も言えなくなった。
「おい！それでどうするんだ？」
「ん？ああ、連絡して迎えにきてもらうしかないか。」
C．C．の声にルルーシュは騎士団に連絡を取り始めた。
「ええっと初めまして、サフィールです。貴女は一体？」
「私はC．C．だ。そうだな、ルルーシュとは将来を誓い合った仲だ。」
C．C．のとんでもない発言にサフィールは呆けてしまっていた。
「おい！でたらめを言うな！」
騎士団に連絡を終えたルルーシュがC．C．に反論していた。
「兄様とC．C．さんはそんな関係だったんですね！」
「違うサフィール！こいつの言うことを信じるな！」
「え、でも？」

「酷い男だ。」
「いい加減にしろC．C．！」
それから迎えが来る間、三人は何事もなく雑談していた。
そして、迎えがきたらしく誰かが走ってくる足音が聞こえた。
「お迎えが来たようだな。」
すでにルルーシュは仮面を被りなおし、サフィールとC．C．はルルーシュの後ろに立った。
走ってきたのはカレンだった。
「ゼロ！大丈夫ですか？他のメンバーは先に・・・誰！」
後ろにいるサフィール達を見ると、すぐさま警戒しだした。
「ああ、心配しなくていい。彼等は私の大切な仲間だ。」
「え？」
「C．C．、私は雪がどうして白いのかは知らない。しかし、白い雪は綺麗だと思う。私は・・・嫌いではない。」
「・・・そうか。」
二人の会話にサフィールは自分が気絶している間に何を話していたのかが気になった。

その後、サフィールはルルーシュと共に黒の騎士団に合流することになった。

黒の騎士団ルート
第11話

ナリタでゼロの正体が亡くなった兄だと知ったサフィールはあの後黒の騎士団に入団することになった。

当初は幹部から反対の意見が出ていたが、ゼロがサフィールは自分達の正義に賛同したから入団を許可したと、説明して幹部達にはどうにか納得してもらった。

入団するに合わせて、サフィールはルルーシュから名前を変えるように言われ、フィール・リエステルと名乗ることになった。

しかし、ゼロ以外の全構成員が日本人であるこの組織にサフィールが何事もなく入団したことで不穏な空気が出ていた。

「(仕方ないといえば仕方ないか)」

現在ナリタ戦で消費した弾薬などの物資が届いているか確認しながら、サフィールはこの空気をどうにかなければいけないと考えていた。

とはいえただでさえブリタニアと戦う彼らにとって、ブリタニア人である自分が仲間になる事をそう簡単に受け入れられる訳ではないだろう。

今でさえ団員の中にはサフィールがスパイではないのかという声が出ている。

そんな中どうやってこの空気を払拭すべきかと悩んでいると、サフィールに誰かが近づいてきた。

「ねえ」

「はい、何ですか?」

近づいてきたのは紅蓮弐式のパイロットであり黒の騎士団のエースである紅月カレンだ。

「何で黒の騎士団に入団したの?」

入団した理由を聞いてくるカレンにサフィールはどう答えればいいか迷っていた。

「(兄様のことを言うわけにはいかないしどうすれば・・・)」
「ねえ、聞いてるの?」
いつまでも答えないサフィールがもどかしいのかカレンは聞いてきた。
「見極めたいと思ったんです」
「見極めたい?」
「はい。黒の騎士団が日本を解放した後どうするのか、解放するまでの騎士団の正義が正しいのか見極めたいと思い入団したんです。」
カレンの目を見ながらサフィール自身が黒の騎士団ができて思ったことを答えた。
「あたし達の正義は正しくないっていうの?」
正義があるのか見極めるというか言葉が癇に障ったのか少し苛立ったように聞いてきた。
「その正義が正しいのか見極めるんです。紅月さん達からしたら不快に思うかもしれませんが、私は貴女達の味方のつもりです」
そうハッキリとカレンに告げ、サフィールは目録に記されている物資に漏れが無いことを確認した。
「そう。だったらあたし達の正義が正しいって事をアンタに見せてあげる」
そう言いながらカレンはサフィールに手を差し出した。
サフィールは差し出されたを握手すべきか考えたが、しないのは失礼だと思いおずおずと手を差し出し握手した。
「これからよろしく。あたしのことはカレンでいいわ。もちろんさん付けもいらないわ。」
「はい。よろしくお願いしますカレン」
お互いに握手したサフィールとカレンはそれからもカレンから日本について教えてもらった。
それからもサフィールは他の団員にも日本について聞いてきて、団員は少し驚きながらも色々と話してくれてギスギスした空気は少しずつ改善し始めていた。

数日が経ちラウンジにゼロを含む幹部であるカレン達が集まっていた。
話の内容はキョウトという支援組織から、ナリタ戦での紅蓮弐式の活躍を褒め称えた事を伝える文と直接会いたいという勅書が届いていた。
「(キョウト・・・)」
軍にいた頃は多くのレジスタンスを支援する組織がいる事は知っていたが、その実態は未だに掴めていなかったのである。
「仲間とか言って顔を見せない奴が!どうなんだよゼロ?ああっ!」
キョウトについて考えていると、幹部の一人である玉城の声に顔を上げるとゼロが顔を見せないことへの不満を言っていた。
「ゼロの正体がどうとかって問題じゃないでしょ。」
そんな玉城にカレンが立ち上がりゼロを庇った。
「ゼロはあのコーネリアを出し抜く実力を持った私達黒の騎士団のリーダーなのよ!他に何が必要だって言うのよ?」
確かにナリタではコーネリアを出し抜いたことは事実であり、玉城達もそこは認めているがあの時は状況が状況だったこともある。
「チッ!」
それから誰一人言葉を発することもなく、ゼロは私室に戻り扇や玉城達幹部は外に出て、ラウンジに残ったのはサフィールとカレンだけとなった。
「ねえフィール」
「何ですかカレン?」
「貴方もゼロが正体を明かさないことが問題だと思う?」
カレンの質問に正体を知っているサフィールはどう答えるべきかと思った。
「カレンはどう思ってるの?」
「私は・・・問題無いと思う」
「どうしてそう思えるの?」
「正体がわからなくて不安じゃないって言ったら嘘だけど。それでもゼロはコーネリアを出し抜くほどの実力を持ってるから、私達には必

要なの。」
「そうなんだ」
しっかりと考えているカレンにサフィールは強いなと思った。
「貴方はどうなの？」
「私は・・問題無いと思いますが、やっぱり正体は知りたいと思います」
「どうして？」
「誰だって顔もわからなかったら信じることができないですし、誰だってちゃんと面を向かって話したいでしょう、今の私達みたいに。」
微笑みながら言うサフィールにカレンはポカンとした表情になると、すぐに微笑み返しくれた。
「ふふっ、確かにそうだね。」
お互いに笑い合うとカレンは二階のゼロの私室に向かい、サフィールはその部屋にいる兄がこのまま正体を明かさないのかと考えた。
考えていると少し表情を暗くしたカレンが降りてきて何も言わずに外に出た。
サフィールは二階に上がり扉の前に立った。
「ゼロ、今いいですか？」
「構わん」
部屋に入ると仮面を外したルルーシュがＰＣ端末を操作しながら何か考えているようだ。
「どうしたサフィール？」
「兄様、皆さんに正体を明かす気は無いんですか？」
「残念だが明かす気はない」
正体を明かさないと断言する兄にサフィールは残念そうにしていた。
「話はそれだけか？」
「いや、えっと・・・何を見てるんですか？」
「キョウトとの会合に来る人物をリストアップしていたんだ」
そう言ってリストアップした人物を見せサフィールはその人物達を見ていた。

「兄様は誰が来ると考えているんですか？」
「俺の予想では・・・この人物だ」
操作して出された人物は禿頭の老人だった。
「この老人は？」
「桐原泰三。キョウト六家の重鎮で実質的なトップだ」
「トップが直々に来るなんて」
トップが直々に来ることにサフィールは驚いていた。
「日本解放戦線が壊滅した現状では、殆どの抵抗組織はコーネリアによって殲滅されている。そして、有力な抵抗組織は黒の騎士団以外そう残っていないだろう。」
「確かに解放戦線を援助していたキョウトは、今度は黒の騎士団に乗り換えるべきか今回の会合で確かめると」
「そうだ。そこでサフィール、お前が相手の立場ならどうする？」
「えっ！えっと、やっぱりゼロの仮面を外させると思います。例えばＫＭＦを使ったりして」
相手の立場になって考えて言うと、ルルーシュも同じなのか頷いていた。
「お前も俺と同じ考えか。そうなれば外さざるをえないだろうが俺はそこを逆手に取る」
「逆手に取る？・・・まさか相手のＫＭＦを！」
相手が脅迫に使うＫＭＦを奪えれば優位に立つことが出来るだろう。
「そこまで考えるとはさすがは俺の弟だな」
褒められるとわかるとサフィールは嬉しく思い表情を綻ばせた。
「へへっ」
「お前の言う通り俺は当日相手のＫＭＦを奪いこちらが有利に立つ」
「何か手伝えることはありますか？」
「いや、お前は当日は留守番を頼む」
「そうですか・・・」
兄の役に立ちたかったが手伝えることがないと言われ落ち込んでいると、ルルーシュはそんなサフィールの頭を撫でていた。

「心配しなくてもお前は役に立ってるよ」
ルルーシュに頭を撫でてもらえてサフィールは嬉しく表情を綻ばせていた。
しばらく二人は雑談しサフィールは部屋を出た。
「当日は何も無ければいいな」
留守番となったサフィールは当日は問題なく済むように祈るのであった。

第12話

キョウトとの謁見は予想通り一悶着あったものの問題なく終わった。

黒の騎士団はキョウトから全面的な支援を受けることになったおかげでより活動しやすくなったのであった。

だが、その日以降ゼロが何か落ち込んでいるように感じ、カレンも同様に何か落ち込んでいたのであった。

「何があったんだろう?」

二人が何故落ち込んでいるのか分からずサフィールは首をかしげるのであった。

それから黒の騎士団はベイエリアにＫＭＦを運び込んでいた。

コーネリアが海外に逃亡しようとする日本解放戦線の中心人物の一人である片瀬少将の捕獲を目論んでいた。

解放戦線は港に停泊しているタンカーを改造しナリタに代わる拠点としていたが、その情報がブリタニアに掴まれてしまったのだ。

また改造したタンカーには大量の流体サクラダイトが積載されており、コーネリアはナリタで投入しなかった海兵騎士団を今回の作戦に投入しタンカーを確保するつもりのようだ。

そのため黒の騎士団はキョウトから海外逃亡を図る解放戦線の援護するよう要請されたのだ。

「ちょ、ちょっと待ってくれゼロ!」

ＫＭＦを運び込んだ倉庫でゼロから説明された作戦に扇が納得がいかないという様子だった。

ゼロは解放戦線を援護せずコーネリアを捕獲するようだ。

しかし、扇としては解放戦線を海外に逃亡させるより黒の騎士団に受け入れるべきだと考えているようだ。

それからコーネリアを捕獲してブリタニア軍の動きを止まるため、解放戦線の吸収はその後でも問題無いとゼロは説得し、扇は納得し団員達は作戦準備に取り掛かり始めた。

その時カレンがゼロに何か話しがあったようだが、ゼロはやること

があると言ってこの場を後にした。
「カレンどうかしたの?」
一人で倉庫に残るカレンが気になりサフィールは声をかけた。
「ねえフィール、私達のやり方は正しいのかな?」
「どういうこと?」
「ナリタでの戦いでね、私の友達のお父さんが・・・亡くなったの」
ナリタの戦いと聞きサフィールはあの土砂崩れを思い出し、その時のその父親が亡くなったようだ。
「その父親を死なせた事を後悔してるの?」
「・・・うん」
カレンは小さく頷き表情も暗かった。
「私はこれまで正義のためにと思ってブリタニアと戦ってきたんだけど」
「友達の父親を殺してしまって自分達のやり方が正しいのかわからなくなった」
カレンはまた小さく頷いた。
「カレン、私は正しいのかはわからないけど、立ち止まってはいけないと思う」
「どうして・・・そう思えるの?」
はっきりと告げるサフィールにカレンは尋ねた。
「これからの戦いで私達は多くの一般人を巻き込んでしまうかもしれない。今のカレンのように迷ってしまうかもしれないけど、それでも私達は進まないといけないと思う。巻き込んで犠牲にしてしまった人達のためにも私達は止まってはいけないんだ。」
「本当にそれが正しいのかな?」
「それは私にもわからない。それでもまだ迷いが晴れないなら、君はここで降りるべきだ」
「えっ!な、何を言ってるの?」
降りるべきという言葉にカレンは狼狽えていた。
「カレン、君は優しい。また犠牲を出すことが辛いなら私がゼロに頼むよ」

カレンは少し考え込み、顔を上げたその瞳には迷いが無かった。
「・・・いいえ、私は戦う。あなたの言う通り亡くなった人達のためにも私は立ち止まらない」
「そうか。君はそう決めたんだね。」
「うん。色々とありがとうフィール。」
「気にしないでいいよ。私もカレンは暗い顔をするより笑顔を見るのが好きだから」
「な、なな、何言ってるのよ！」
好きという言葉にカレンは顔を赤くし先ほどよりも大きく狼狽えていた。
「どうしたんだい？」
「何でもない！」
カレンは立ち上がると紅蓮の元に早足で移動するのであった。
「どうしたんだろう？」
何も変なことを言ったつもりは無いサフィールは、どうしてあんなに狼狽えていたんだろうと首を傾げていた。
それから団員が作戦準備に取り掛かってる中、サフィールはゼロの所に向かっていた。
「確かこの辺りのはず？」
ゼロがいる場所を確認しながら進むと、ウェットスーツを着たルルーシュが何かを持って海に入ろうとしていた。
「何をしてるのゼロ？」
「サフィール！どうしてここに！」
サフィールがこの場にいることにルルーシュは驚いていた。
「ゼロ、それはもしかして・・・爆弾・・・なの？」
作戦の決め手として仕掛けようとした物を見られた上にバレたことにルルーシュは焦っていた。
「ああそうだ。これを解放戦線の進路上に設置して海兵騎士団を壊滅させる」
ルルーシュからの説明にサフィールは驚きを隠せれなかった。
「そんな！そんな手段はダメです兄様！」

ルルーシュが行おうとする事にサフィールは兄様と呼んでしまう程に驚いていた。
「ならどうする！コーネリアとこちらの戦力差を覆すにはこれしかないんだ！」
ルルーシュの言いたい事はわかるが、それでもこんな方法を認めるわけにはいかなかった。
「ならせめてお願いがあります！」
おそらく兄は何を言っても考えを変えないだろう。
なら可能な限り犠牲を少なくするためあるお願いを申した。

あれからどうにかルルーシュを説得し、サフィールは扇と数名の団員と共に解放戦線に接触していた。
「よくぞ救援に来てくれた、感謝する」
タンカーの司令室に案内され、そこで解放戦線のリーダーである片瀬から救援に来たことを感謝された。
「それで話とは一体？」
「あ、それについては彼が・・・」
彼という言葉にサフィールは前に出て、片瀬や解放戦線のメンバーはブリタニア人であるサフィールを訝しげに見ていた。
「お初にお目にかかります片瀬少将」
「うむ。それで話とは何だ？」
「はい。無礼を承知言いますが、ここで死ぬつもりですか？」
サフィールのとんでもない発言に片瀬達や扇たちは呆気にとられていた。
「貴様！ふざけているのか！」
部屋の中にいる解放戦線の兵士は機関銃をサフィールに向け怒鳴った。
「ふざけてはいません。正直に申しますと、貴方方を国外へ脱出させるのは不可能です」
「貴様！またしても！」
また怒鳴る解放戦線の兵士を片瀬は手で制した。

「何故、そう言い切れるのかね？」
「まず、我々の戦力とコーネリアの軍の戦力は圧倒的な差があります」
　姉であるコーネリアを呼び捨てにする事に罪悪感を感じながらもサフイールは話を続ける。
「うむ」
「こちらが陸上部隊を抑えることはできても海兵騎士団を抑えることはできません」
　黒の騎士団の戦力は紅蓮一機に無頼が数機という戦力しかないため、どうやっても海中を移動するポートマンを抑えることは不可能である。
「なら何故君達はここに来たのだね？」
「単刀直入に言います。我々と合流する気はありますか？」
「うむ・・・」
　黒の騎士団と合流しないかという片瀬どうすべきか迷っているようだ。
「正直今の貴方達ではブリタニアと戦うことすら出来ずに殺されてしまいます」
　はっきりと告げるサフィールに片瀬は内心同じことを何度も思うことがあったが、認めてしまえばブリタニア屈すると思い認めていなかった。
　だから、国外に脱出して戦力を整えようとしていた。
「それに藤堂中佐や四聖剣と合流できていないまま国外に脱出することは本意ではないはずです。」
「・・・・・・」
　サフィールの言う通り片瀬も本来なら藤堂達と合流して国外に脱出したかった。
「このまま脱出する道を選ぶのは貴方です。貴方はここで将兵を無駄死にさせる道を進ませるつもりですか？」
「・・・・・・」
　片瀬は手を組んで目を閉じ、サフィールの言葉に耳を傾ける。
「組織は違えど日本を解放するという思いは同じはずです。もし我々

と共に来てくれるのなら喜んで歓迎します。若輩者の身でこれまで無礼申し訳ありませんでした」

そう言いサフィールは頭を下げ、扇達も頭を下げた。

「少しだけ考えさせてくれないかね。」

「わかりました。ですがあまり時間はありませんのでお早めに。」

そして、サフィール達は司令室を退室してタンカーを降りた。

「君は・・・凄いな」

「え?」

タンカーを降りて待つサフィールに扇が褒めてきた。

「何がですか?」

「いや、あの場であんなに堂々と言うなんて驚いたよ」

「色々と言って皆さんにも迷惑がかかったかもしれないのに申し訳ありません」

「気にしなくていいよ。俺としては解放戦線には合流して欲しいという思いがあったんだ。それを君はやってくれて俺は嬉しかったよ」

扇の言葉に他の団員達は頷き、サフィールは少し照れくさかった。

それからタンカーから十数名の解放戦線のメンバーが降りてきた。

「片瀬少将からの伝言だ。我々はこのまま脱出の道を選ぶ。」

合流してくれない事に扇や団員達は残念そうにしていた。

「しかし、閣下はもし彼等と合流したい意思があるのならば合流して良いと言われた。」

その言葉にまさかとサフィール達は顔を上げる。

「だから、我々は君達と共に日本を解放したいと思い合流したいがいいだろうか?」

「い、いえ!こちらこそありがとうございます!」

自分達に合流してくれることがわかり、扇や団員達はとても喜んでいた。

喜んでいるサフィールに先ほど話していた男はサフィールに近づいた。

「あの、何か?」

「閣下が君に日本軍人の誇りを見せると仰っていた。」

一体どういうことだろとサフィールは思ったが、その言葉の意味をこの戦いで知ることになるのであった

第13話

「まさか本当に引き抜いてくるとはな。」
サフィールが解放戦線の兵士を十数名引き抜いてきた事という報告に、ルルーシュは驚くと同時に感心していた。
作戦前に解放戦線を説得して引き抜いてくると言った時は無駄な足掻きだと考えていた。
考えが古い彼等がこちらに合流しないと確信していたが、サフィールは見事解放戦線から十数名の兵士を引き抜いたのだ。
「こちらとしては嬉しいことだな。」
ナリタの戦いで生き残った団員は戦闘の経験を積んだとはいえ、本業の軍人である解放戦線はとは違うため貴重な戦力になるであろう。
「それに、これは必要なさそうだな。」
そう呟くルルーシュの視線の先には先程仕掛けようとした爆弾があった。
サフィールから引き抜いた報告の他に解放戦線の兵士の言葉も報告されており、ルルーシュはそれがどういう意味なのか理解したのだ。

そして、日が沈み夜に変わってしばらくすると湾岸付近で爆発が起きた。
「どうやら姉様の方が動いたのか。」
退路の確保を命じられたサフィールは倉庫内に隠してある無頼のコックピットの中で爆発音が聞こえた。
一方ブリタニア軍は予定通り海兵騎士団がタンカーへと取り付き始める中、陸上部隊に配備されたランスロットを操縦するスザクはおかしなことに気づいた。
「誰も出てこない？」
陸上部隊はタンカーに取り付く海兵騎士団の援護と片瀬以外のイレブンを殲滅しろと命令されているが、タンカーの甲板には誰一人解放戦線の兵士の姿は見当たらず一切の抵抗が無かった。

「何か、嫌な予感がする。」
　他のサザーランドのパイロットは自分達に恐れをなして隠れていると決めつけていたが、スザクはこの状況に一抹の不安があった。

　今も海兵騎士団が取り付いているタンカーの司令室の中では、片瀬と数名の解放戦線の兵士が日本酒が注がれた盃を持って立っていた。
「お前達も彼等と合流してもよかったのだぞ?」
　片瀬の問いに兵士達は首を横に振り否定の意思を示した。
「あの少年の言う通りというわけか。」
　タンカーにはすでにポートマンが取り付いており、自分がブリタニアに捕獲されるのも時間の問題だろう。
「せめて藤堂達が無事であることを確認したかったが・・・それももう無理か」
　片瀬は自分達解放戦線の希望ともいうべき存在である藤堂や部下である四聖剣を思い浮かべるが、今も行方が分からず無事であることを祈るばかりである。
「始めてくれ。」
　タンカーのある場所に指示を出した片瀬は兵士達の方に向き直る。
「我らがここで潰えようと、我らの意志を継ぐ者がいる限り日本は不滅なり!日本万歳!」
「「日本万歳!!」」
　言い終わると片瀬は盃の日本酒を飲み干し、盃を床に投げると兵士達も同様に叫び盃を地面に投げた。
　そして、片瀬達は光に呑まれたがその表情は満足そうだった。

「今のは!」
　倉庫で待機していたサフィールはとてつもない爆発音が聞こえた
「扇さん今のは?!」
　外でブリタニア軍の動きを見張る扇にサフィールは通信する。
『サフィール、日本解放戦線が積んでいた流体サクラダイトを使って自爆したらしい。』

片瀬が日本軍人の誇りを見せるという意味に、サフィールは理解すると同時に認めたくなかった。
「(死んだら意味はないでしょう!)」
そう叫びたい思いが出てくるが、サフィールはぐっと抑える。
「・・・作戦はどうなりますか?」
「ゼロはこのまま本隊をコーネリア本陣に突入させた。うまくいけば、このまま討ち取れるぞ。」
「・・・わかりました。では、私も退路の確保に移ります。」
「ああ、頼む。くれぐれも気をつけてくれ。」
「はい、任せてください。」
無頼を起動すると同時に倉庫を出ると退路の確保へ向かう。
サフィールはちらっと戦況を確認する。
戦況は先程の爆発に乗じて本隊は敵の本陣に突っ込んでいた。
強襲艇から発進したゼロの無頼とカレンの紅蓮はコーネリアの元に向かい、残りの無頼はパイロットがＫＭＦに乗り込む前に機体の破壊したりゼロを狙う機体を破壊していた。
「兄様、姉様・・・」
サフィールはルルーシュとコーネリアの事を思うが、今は退路を確保しなければと気を引き締める。
「ここだな。」
退路とされているポイントには当然部隊が配置されていた。
しかし、先程の爆発や本陣で今も起こる爆発に部隊はどうすればいいか迷っている様子だった。
そこへサフィールの無頼が現れ、突然の敵に部隊は慌てだした。
「サザーランドが二機に後は装甲車一台に歩兵だけか。」
そんな中サフィールは冷静に敵の戦力を分析する。
そして、サフィールは最初の標的をサザーランド二機に決めた。
二機のサザーランドは慌ててアサルトライフルを無頼に向けるが、すでにアサルトライフルを構えている無頼は二機のサザーランドを撃つ。
呆気なく二機のサザーランドを破壊し、次に装甲車を破壊する。

最後に残った歩兵を対人機銃を掃射して一掃する。
「扇さん、こちらは退路の確保は完了しました。」
『・・・ああ、ちょっと待ってくれ。・・・ゼロが』
「ゼロに何があったんですか!?」
ゼロの身に何かあったと聞き、サフィールはゼロの無頼の反応があるポイントに向かう。
戦況は混乱していたことや爆煙などのおかげで、サフィールは難なくゼロの無頼の反応があった座標に向かう。
「兄様・・・何処?」
並んでいるコンテナ辺りを見渡すと、半壊した無頼を発見した。
半壊した無頼に近づいて、サフィールは機体から降りた。
サフィールは倒れているゼロを見つけて近づくと、その近くに血痕を見つけて焦り出した。
「兄様!兄様!」
サフィールはルルーシュを呼びかけながら体を揺さぶる。
「うぅ・・・」
ルルーシュは気絶しているようで、目立った外傷はなかった。
「ほう、お前が先にきていたか。」
声をかけられてサフィールは振り返った。
「C.C.さん?どうしてここに?」
そこにいたのはいつもの拘束服ではない違う服を着て、帽子を目深く被っているC.C.がいた。
「ん?どうした?何を見つめているんだ?」
普段と違う服装にサフィールはC.C.を見つめていたようだ。
「す、すいません!いつもと違う服装だったので。」
「こんな時に見惚れるなんておかしな奴だな。」
C.C.の言葉にサフィールは顔を少し赤くしうつむかせる。
彼女の言う通り今も戦闘中である事を思い出し、何を考えているんだと恥ずかしくなった。
「うぅ・・・」
「兄様!兄様!」

「っう・・・、その声はサフィールか？」
目を覚ましたルルーシュは辺りを見渡した。
「C．C．、お前もいたのか。」
「ああ、何処ぞの坊やが心配で心配で仕方なくてな。」
「そうか、それは有難いな。」
二人のお互いに遠慮の無い会話にサフィールはちょっと羨ましいなと思った。
「兄様、それでこれからどうしますか？」
「撤退だ。これ以上の戦闘は無意味だからな。」
日本解放戦線の自爆に乗じて本陣に奇襲したが、白兜の妨害によって時間を稼がれてしまいコーネリアにはすでに親衛隊が護衛にまわり始めている。
コーネリアの捕獲が不可能であるため、これ以上の戦闘はルルーシュの言う通り無意味である。
「サフィール、すまないが扇への連絡を頼めるか？」
「わかりました兄様。」
サフィールは扇にゼロが無事である事を伝え、撤退の指示を出すよう頼み連絡する。
「どうしましたか兄様？」
扇に連絡したサフィールはゼロの仮面を持つルルーシュの表情が何か不安そうな表情が気になり聞いてきた。
「俺の銃が無くなってるんだ。」
「兄様の銃が無くなっている？」
「ああ。俺が気絶している間に、誰かが持って行った。」
「ということは・・・お前の素顔が見られた。」
「一体誰が・・・？」
素顔を見られたという事実にサフィールは驚きを隠せなかった。
「少なくとも二人だろう。」
ルルーシュの視線はこの場にある血痕に向かれる。
「撃った奴と撃たれた奴・・・二人いる。」
ゼロの素顔を何者かに見られたという事実に、サフィール達は不安

を隠せないままこの場から撤退した。

第１４話

あれから不安を隠せないまま、ベイエリアから撤退したサフィール達は黒の騎士団本部に戻った。
素顔見られた事や銃の紛失はルルーシュが自身で調べるらしい。
サフィールも何か手伝いたかったが、心配するなと頭を撫でられながら言われてしまい仕方なく引き下がった。
そんなサフィールは先の戦闘で消費した弾薬や無頼の修理に必要なパーツなどの物資を資料にまとめていた。
資料をまとめ終えて扇に渡しに行こうとすると、紅蓮の側で悔しそうな顔で立つカレンを見つけた。
「どうしたんですか、カレン？」
「あ、フィール。・・・ちょっとね。」
「何か悩んでいるようでしたけど？」
「実はさっきの作戦のことでね。」
先の作戦ではカレンはゼロと共にコーネリアの追い詰めていたが、後一歩の所で白兜に邪魔されてしまったらしい。
「あの時私が白兜を抑えられていたら・・・！」
カレンは自分がもっと上手くやれていたらと思っているようだ。
サフィールとしては白兜のパイロットがスザクである事を知っているため、知り合いと仲間が戦い合うということに複雑な気持ちだった。
「でも、カレンは凄いと思うよ。」
それでもサフィールはカレンに嘘などではなく思ったことを言った。
「え？」
「その白兜には私達では太刀打ち出来ないのに、やり合えるカレンは凄いですよ。」
「でも・・・」
そう励ますがまだカレンとしては悔しそうな表情だった。
「それに紅蓮を上手く操縦できるカレンだからこそあの白兜に太刀打

ちできるんですよ。だから自信を持ってください、ね？」
「うん。ありがとうねフィール。」
サフィールの説得で吹っ切れたのカレンは笑っていた。
その笑いにつられサフィールも笑っていた。
「やっぱりカレンは笑顔の方が似合っていますよ。」
「な！何言ってるのよ！」
突然の言葉にカレンは照れているのか頬を赤くした。
「それにカレンがそんな風に悩んでいるなんて、カレンらしくありませんしね。」
笑いながら言うその言葉に笑っていたカレンの表情も笑っていたが目は笑っていなかった。
「ねえフィール？」
「はい？何でしょうか？」
「それってつまり、サフィールは私のことを普段から何も考えていないって思ってたの？」
カレンの手はサフィールの肩を掴み逃げないようにした。
「いや、それは・・・その・・・」
「どうなのかしら？」
「えっと、何というか・・・カレンは野生と言うべきか本能と言うべきか・・・」
「へえ、野生に本能ねえ・・・。フィール、ちょっと来てくれるかしら？」
その言葉には有無を言わさない圧を感じ、サフィールはどうにかこの場から逃げないといけないと思った。
「そ、そうだ！この資料を扇さんに渡さないと！」
資料を理由にこの場から逃げようとしたが、カレンがサフィールの手から資料を掠め取る。
「ねえ、これ扇さんに渡してくれる？」
「はい、わかりました」
カレンは近くにいた団員に渡すように頼んで資料を渡した。
「さて、これで大丈夫だね。」

そして、騎士団本部に少年の謝る声が木霊するのであった。

それから数日が経ち、ゼロは騎士団にマオという人物を捜索するよう命令してきた。

「マオ・・・か。」

サフィールは騎士団命令してまで捜索するマオという人物についてルルーシュに聞きたかったが、現在ルルーシュは本部にはいないため聞くことができない。

「一体何者なんだろう?」

サフィールはマオという人物の目的について考察して見ることにした。

「マオは多分兄様の正体を知っている。でも、軍に情報が入った様子がないから軍関係者じゃない。」

可能性を一つずつ提示していき、違う可能性は排除する。

「兄様に恨みを持つ人物?にしては兄様に対して何らかの行動を取ってるわけではない。」

可能性を出して考えてみるが、ルルーシュの接点が見つからずサフィールは頭を抱える。

「うーん・・もしかして目的は兄様じゃない?だけど、兄様の正体を知ってるから危険な存在であることには違いがないのか。」

目的がルルーシュではないと仮定して再び考える。

「なら一体何が目的なのか?」

ルルーシュの周りの人間を思い浮かべる。

最初に騎士団の誰かを思い浮かべるも違うと断定する。

騎士団にマオを捜させる時点で騎士団とは関係ない。

次に交友関係を思い浮かべようとするが、サフィールはルルーシュから友人の話を聞いたことがないため判断出来ない。

「いやまてよ・・・いた。一人だけ可能性のある人物が」

サフィールが思い浮かべたのは、緑色の髪の謎多き少女C・C・。

「マオの目的がC・C・さんなのか?」

一番高い可能性だと思えるが、サフィールの憶測である事と情報が

余りにも少なすぎるため断定出来ない。
「こればかりは本人に聞くしかないか。」
今は本人が本部にいない為、サフィールは今度居た時に聞くことにした。

第15話

「（緊張するな・・・）」

マオの目的を考察してから数日が経ち、サフィールは現在空港に来ていた。

マオの捜索は考察の翌日に打ち切られ、ゼロが言うにはもう捜す必要はないようだ。

そして、サフィールはある目的のために空港に来ていた。

近くにはカツラを被り眼鏡をかけて変装しているスーツ姿のC．C．にディートハルトと電話するルルーシュがいた。

「（おかしくはないかな？）」

サフィールもC．C．と同じように変装しており、おかしくなってないか少し気になっていた。

「いいのか？私が使者で？」

C．C．は腕時計を見て時間を確認しながらルルーシュに尋ねる。

「遜れば舐められる。そういう相手なんだろう中華連邦は？」

「自信がないな。私はお前と違って謙虚だからな。」

「その調子なら大丈夫そうだな。」

「それと・・・本当にこいつも同行させるのか？」

C．C．はサフィールが同行することに納得してない様子だった。

「仕方ないだろう。いつのまにかパスポートを用意されていたんだ。」

ルルーシュとしてもサフィールを使者として同行させる気は無かった。

しかし、ルルーシュが何を言っても今回だけは頑なに嫌だと言いサフィールはいうことを聞かなかった。

「すまないがサフィールのことは頼む。」

「はぁ・・・面倒だからギアスで命令すれば楽なんだがな。」

「そのことは言うな！」

C．C．の言葉にルルーシュは声を小さく荒げた。

ルルーシュは自身が持つギアスという特殊な力の事をサフィールに知られたくなく、その上大切な弟にギアスを使いたくなかった。

ギアスの事を聞かれてないかサフィールを見るが、サフィールは変装が問題ないか確認しており聞かれてはいないようだ。
「それよりパスポートは？」
「よく出来てるよ。いけそうだ。」
「そうか。サフィール、本当に行くのか？」
「はい。遊びに行くわけではありませんからね。」
元気よく言う目の前の弟の行く気満々の様子にルルーシュは溜息を吐き諦めることにした。
「気をつけるんだぞ。」
「はい！」
そして、サフィールはC．C．と共に搭乗口に向かう。
「まったくなんで私が・・・」
中華連邦との交渉は問題ないが、サフィールの子守まですることは聞いてなかった。
「すいませんC．C．さん。」
申し訳なさそうにサフィールは謝り、今更何を言っても意味がないため諦めることにした。
「それで、わざわざ準備してまでついてきて何を聞きたいんだ？」
サフィールが中華連邦の使者としてC．C．に同行した目的は聞きたいことがあったからだ。
「やっぱりわかってましたか。」
「それ以外に考えられないからな。」
「ハハハ・・・」
バッチリと目的がバレている事にサフィールは苦笑していた。
「それで何を聞きたいんだ？」
「では、マオという人物と貴女に関係があったんですか？」
「ほう？どうしてそう考えるんだ？」
サフィールは以前考察したマオの目的を話した。
「なるほど。そこまで考えるとはな。」
少ない情報でマオの目的が自分だと考察したサフィールにちょっとだけ驚いていた。

「では?」
「ああ、その質問の答えは・・・ＹＥＳだよ。」
「やっぱりそうでしたか。」
となるとマオという人物はすでに処理されたと考えた。
「次の質問ですが・・・ギアスとは一体何ですか?」
ギアスについて質問した瞬間、Ｃ．Ｃ．は驚いた表情をしていた。
先程のルルーシュに言った事がバッチリと聞かれていたことに、今回に限ってしまったと思っていた。
「さあ、何のことだ。」
「惚けても無駄ですよ。しっかりと聞きましたから。」
一応惚けてみたがしっかりと聞かれており誤魔化しようがなかった
「兄様には言わないので安心してください。」
Ｃ．Ｃ．は自分を見るサフィールを見ながらしばらく考えると
「・・・わかった。だが、ここで話すことは出来ない。」
「わかりました、交渉が終わった後に話してください。」
「ああ・・・」
そして、中華連邦行きの飛行機に乗り込もうとした時、Ｃ．Ｃ．は飛行機に乗らなかった。
「Ｃ．Ｃ．さん?」
「すまないが交渉はお前に任せる。」
「えっ!?」
突然の言葉にサフィールは驚くしかなかった。
「やり残したことがあるんだ。・・・頼む。」
Ｃ．Ｃ．の真剣な表情からサフィールはそのやり残したことが、彼女にとって大切なことだと思った。
「わかりました!任せてください!」
「・・・本当にすまない。」
Ｃ．Ｃ．はそのまま空港に残り、サフィールの乗る飛行機は中華連邦に向かったのであった。
数時間後、サフィールの乗る飛行機は上海空港に到着し、飛行機を

降りたサフィールは空港内にいる現地の案内人を待つことにした。
しばらく待っていると一人の男がサフィールに近づいてきた。
「黒の騎士団の方でお間違い無いでしょうか?」
男は小声で問いかけ、サフィールは頷いて肯定する。
「ご案内します。」
案内人について行き、用意された車に乗って交渉場所に移動する。
それから少しした後、交渉場所と思われる建物に車が入っていった。
「こちらです。」
車を降りて交渉場所である部屋に案内され、サフィールは扉を開けて部屋の中に入る。
部屋には長髪の男が待っていた。
男を見たサフィールが抱いた印象は、只者ではないという印象だった。
目の前の男は姉であるコーネリアの騎士であるギルフォードやダールトンにも引けを取らないように感じた。
男が椅子に座り、その後にサフィールも椅子に座る。
「黎星刻(リー・シンクー)だ。」
「フィールです。」
男は星刻と名乗り、サフィールも名乗り返す。
お互いに自己紹介を終え、ここからが正念場である。
「それで我々と手を組むという話ですが。」
「こちらは手を組む気は無い。」
手を組み気がないという言葉にサフィールは驚かなかった。
「理由をお聞きしても?」
「貴公らと手を組んでもこちらに利がないからだ。」
「確かに我々は日本で最大の抵抗組織ですがブリタニアに比べるとまだまだの組織です。手を組むメリットもあまりないでしょう。」
「・・・・・・」
星刻は何も言わずただじっとサフィールを見つめる。
「ですが、黒の騎士団はこれからも大きくなります。ブリタニアも無

視できない程に。」
「その根拠は？」
「ゼロです。」
「ほう？」
サフィールの根拠に興味深そうに星刻は耳を傾ける。
「ゼロにはある目的があります。そのためにゼロはこれからも力をつけていきます。」
「目的・・・か。」
「はい。こちらとしても今手を組もうとは思ってません。」
「では、何のためにここに？」
「契約を結ぶためです。」
「契約？」
星刻はサフィールの真意がわからず、注意深く続きを聞く。
「ええ。もし、次に合間見えた時、貴方が手を組むべき相手だと判断できたら手を組む契約です。」
サフィールの言葉に星刻は考える。
サフィールの言うように今は手を組まなくても、黒の騎士団の力が強大になれば星刻の目的に利用できる。
それにサフィールがここまで言うゼロに少しだけ興味が湧いてきた。
「・・・いいだろう。その契約を結ぼう。」
星刻が契約を結ぶことに同意してくれたことに、サフィールは予想外だったのか驚いた表情だった。
「少し以外でした。」
「何がだ。」
「いえ、すぐに契約を結べるとは思っていませんでしたから。」
「君の提案する契約に利があると判断しただけだ。」
「そうですか。では、こちらも頑張らなければいけませんね。」
そう言いサフィールと星刻はお互いに握手する。
それからサフィールは部屋を去り、案内人に空港まで送ってもらった。

そして、そのままエリア１１行きの便に乗りエリア１１に戻った。
エリア１１に戻り、ルルーシュに今回の交渉の結果を伝えようとしたが、一人で行ったためか凄く心配されて何もなかったか聞かれてサフィールはルルーシュを慌てて落ち着かせた。
その様子を見たＣ．Ｃ．はブラコンめと呟いていた。

第16話

「さて、何から話そうか」
　中華連邦との交渉を終えて帰国したサフィールに、C．C．から話があるとゲットーの廃墟に連れてこられた。
「それでC．C．さん、ギアスとは一体何ですか?」
「ふむ・・・何から話すか」
　C．C．は話す前に用意していたピザを食しながら、どこから話すか考えていた。
「まず最初に・・・はむ。ギアスとは王の力だ」
「王の力?」
「そうだ。それは人の世に生きながら、人とは異なる理で生きる」
「人とは異なる理・・・」
　ピザを食べながら話すC．C．の話の続きを聞く。
「ギアスは私の願いを一つだけ叶えて貰うことを契約する事でその力を得る事が出来る。だが、王の力を得る代償として契約した者を孤独にする」
「契約した者を孤独に・・・まさか兄様は?」
　今の話と空港でのルルーシュの反応からサフィールは察した。
「ああ。お前の考えている通りだ」
　C．C．自身も認めたことで、サフィールはルルーシュはC．C．と契約してギアスを得たのだとわかった。
「それでどうする?」
「どうするとは?」
「今の話を聞いて、お前も私と契約するか?」
　サフィールは少ししてかぶりを振った。
「そうか。まあ、私にとってはどちらでも良かったがな」
　対してC．C．はがっかりする様子はなく気にしていなかった。
「でも、私は契約なんかなくてもC．C．さんの願いが叶えられるように手伝いますよ」
「・・・そうか。ならその時は存分に手伝って貰うとするよ」

嘘偽りの無い言葉にC．C．は微笑んでいた。
「それと・・・中華連邦の件はすまなかったな」
「気にしないでください。それに、今回の話でおあいこですよ」
「ふっ、そうか。そうだお前も食べてみるか？」
そう言ってC．C．は残ったピザの一切れを差し出す。
「ピザ・・・でしたっけ？」
「そうだ。折角だからお前に分けてやろう」
「えっと・・・頂きます」
ピザを取ったサフィールは口に含む。
とろりとしたチーズにもちもちとした生地にトマトソースが口の中に広がる。
「んぐ・・・ピザって初めて食べましたが、とても美味しいですね」
「そうだろう。お前はピザの素晴らしさが分かるようだな」
ピザが美味しいという言葉にC．C．は満足そうにしていた。
「そろそろ戻るとしよう。ああ、それとサフィール」
「何ですか？」
「今日の話、絶対にルルーシュには話すな。もし知られたとなるとあいつはうるさいからな」
自分にうるさく言うルルーシュを思い浮かべたのか、C．C．は面倒くさそうな表情をしていた。
「わかりました。私も兄様に心配はかけたくありません」
サフィールも頷き、二人はアジトに戻るのであった。
また、二人で何処かに行くのを団員に見られてしまい、戻ったときも一緒だったため二人は付き合ってるいるのではないかという噂が流れることをサフィールはこの時知らなかった。

第17話

C．C．からギアスについて教えて貰ったサフィールはあれから騎士団の活動に励んでいた。

そんなある日、扇さんが団員を招集していた。

「藤堂中佐の救出？」

「ああ。そうだ」

藤堂中佐と言えば日本解放戦線に所属する軍人。

当時日本にＫＭＦがない戦時中、ブリタニアのＫＭＦ部隊相手に一度だけ勝利したとされ、ブリタニア軍にとって要注意とされていた人物。

「どうして藤堂中佐が捕虜に？」

「それは・・・」

彼ほどの人物ならそう簡単に捕まるとは思えず尋ねると、扇は何か言いにくそうにしていた。

「中佐は我らを逃がすために一人犠牲となられたのだ」

声の方向を見るとそこには解放戦線の制服を着た四人の男女がいた。

「フィール、こちらの方々が藤堂中佐直属部隊、四聖剣の皆さんだ」

「この人達が四聖剣・・・」

四聖剣の名はブリタニアや黒の騎士団にも届いており、その実力はコーネリアの親衛隊にも引けを取らない程だ。

「初めまして、フィール・リエステルです」

サフィールは四人に一礼すると、相手も一礼してきた。

「君の事はこちらに合流していた将兵達から聞いている」

「えっと・・・どのような事でしょうか？」

どう言われているか分からないため、恐る恐る尋ねる。

「ブリタニア人でありながら日本のために戦う同志と皆はそう言っていたよ」

「そ、そうですか・・・」

そんな風に言われていた事に対して、サフィールは何だか気恥ずか

しかった。
「そ、そうだ！今回の件についてゼロは？」
「承諾したよ。キョウトからも要請されて、新型機を提供してくれたよ」
「新型機・・・ですか？」
キョウトが新型機を提供するほど藤堂中佐は無くすには惜しい人物のようだ。
「ああ。それとディートハルトが藤堂中佐はチョウフ基地に収監されている事を掴んだらしい」
ディートハルトという言葉にサフィールは聞き覚えがあった。
「（確か・・・そうだ！ジェレミア達が調査を命じた報道屋）」
「フィール、どうかしたのか？」
「いえ、何でもありません。私も新型機の準備を手伝ってきます」
そう言ってサフィールは一礼して格納庫に向かうのであった。
格納庫に到着すると、無頼とは違うＫＭＦが五機並んでいた。
「これが新型機・・・」
「ん？フィール、お前も手伝いか？」
機体を整備していた玉城がサフィールに気づき話しかけてきた。
「はい。玉城さんこれが例の？」
「ああ。キョウトのお偉いさんが用意してくれた新型機の何だっけ？」
「月下だよ。それぐらい覚えとけよな」
機体の名前を忘れていた玉城に代わって南が教えてくれた。
「わーってるよ！あとちょっとで思い出せたよ！」
代わりに答えた南に玉城が怒鳴っていた。
「それよりお前に新しい機体があるってよ」
「え？月下は四聖剣の皆さんや藤堂中佐が乗るはずでは？」
「そっちじゃなくてこっちだよ」
玉城が指さす方を見ると、月下の横に一機だけ無頼が並んでいた。
ただ、通常の無頼とは違い頭部には昆虫の触角のようなアンテナが付いていた。

「これは・・・無頼ですか？」
「無頼改って言って外見は通常の無頼とは大して変わらないけど、内部は強化されていて通常の無頼よりは性能が良いそうだぜ」
「へえ～」
「へえ～ってこの機体はお前が使うんだぞ」
「わ、私がですか？」
南の言葉にサフィールは信じられなかった。
何しろまだまだ新参者である事やブリタニア人である事も含めて、自分に新しい機体を与えられるとは思わなかった。
「まあ、ゼロが言うには騎士団に貢献しているお前へのプレゼントらしい」
貢献しているサフィールに対するプレゼントと言っているが、この無頼改はルルーシュがサフィールの安全性を上げるためにキョウトに要請したのだ。
「ったくよぉ。そりゃ色々とやってるのは認めるけどよお。俺達にもそういうのはあっても良いはずだろ」
「そう言うなよ。実際フィールは入団してから色々と頑張ってるじゃないか」
「そうだけよお。俺が言いたいのはこいつだけじゃなくて俺達にもそういうご褒美みたいなのがあってもいいだろってことだよ」
「わかったわかった。それより作戦が始まる前に準備を終わらせるぞ」
「しゃあねえな。ほら、いつまで呆けてんだよ」
「あ、はい！」
あまりの事に呆けていたサフィールは急いで整備に取りかかる。
そうして作戦開始までに全機体の整備を終えたサフィール達は司令室で、遅れて到着したゼロが作戦概要を説明した。
作戦とは言っても至って単純なものであった。
月下に搭乗した四聖剣が正面ゲートを突破し、基地内の戦力を誘き出して引きつける。
その間にゼロの無頼とカレンの紅蓮弐式が藤堂中佐を救出する。

黒の騎士団の役割は四聖剣の援護に、救出した藤堂中佐に搭乗機を運ぶこと。
また、退路の確保などである。
今回の作戦では、コーネリアはイシカワゲットーでの武力蜂起を鎮圧するため不在である。
そのため、主戦力はいないためこちらにとっては好都合な状況であった。
作戦概要の説明が終え、サフィールは乗機である無頼に乗り込もうとする。
「フィール！」
乗り込もうとするフィールをカレンが呼びかけてきた。
「どうしたんだいカレン？」
「フィールは退路を確保する部隊でしょ。だから、その・・・気をつけてね」
自分を心配してくれるカレンの心遣いにサフィールは嬉しかった。
「はい。心配してくれてありがとうカレン」
「話はそれだけじゃあね」
「はい、カレンも気をつけてください！」
「そっちもね！」
そう言って二人は自信の乗機に乗り込んだ。
「あと１８０秒・・・」
作戦開始まであと少しのため、サフィールは深呼吸して落ち着ける。
時間になり正面ゲートから爆発が起きる。
月下に搭乗した四聖剣は基地から出撃するサザーランドを次々と撃破していた。
「よし、此方も動きます」
「「了解」」
今回は退路を確保した後、その退路を死守しないといけないためサフィールの他に二機の無頼が僚機としてついている。
手筈通りに基地内の戦力が正面ゲートに向けられ、退路に必要なポ

イントには装甲車三台と歩兵だけという最低限の戦力しか残っていなかった。
「私が前に出るので一番機と二番機は援護をお願いします」
「「了解」」
トレーラーから無頼改を発進させると、すぐさま敵部隊に向かって突撃する。
敵部隊は突然の敵襲に慌てふためいていた。
無頼改の武装である廻転刃刀を構えると、手始めに一台の装甲車を切断する。
残った二台の装甲車が砲塔を無頼改に向けるが、二機の無頼のアサルトライフルの攻撃によって破壊された。
装甲車を破壊されたのを見て、歩兵達は皆一目散に逃げていった。
「逃げた歩兵は気にするな。退路を確保する事が優先だ」
二機の無頼に警戒するよう指示し、トレーラーに待機させていた歩兵部隊と合流する。
「ゼロ、退路の確保に完了した」
『よし、こちらも藤堂の救出に成功した。こちらは藤堂達と共に残存戦力を叩く』
「了解。こちらはそのまま退路を死守します」
ここまで問題なく予定通りに進んでいたが、チョウフ基地に白いＫＭＦランスロットが現われた。
「スザク・・・」
スザクのランスロット一機に、カレンの紅蓮に藤堂達五機の月下が攻撃を仕掛ける。
しかし、ランスロットは六機の攻撃を全て回避していた。
「凄い・・・！」
パイロットであるスザクの巧みな操縦技術にサフィールは舌を巻いていた。
しかし、ゼロの指揮によってランスロットは徐々に追い詰められていた。
距離を取ったランスロットに待ち構えていた藤堂の月下がランス

ロットに三段突きを放つ。
だが、藤堂の三段突きをランスロットは回避するも、最後の突きを回避する事が出来ずコックピット近くに刺さった。
藤堂はそのままコックピットを斬り飛ばし、中のパイロットの姿が露わになる。
そこにいたのはやはりスザクであった。
戦闘は続き、藤堂とスザクが競り合った後、四聖剣が四方から同時攻撃を仕掛ける。
ところがランスロットから射出された4つのスラッシュハーケンが突如軌道修正し、藤堂を含む四聖剣の月下の武装に命中して弾き飛ばした。
「これほどの力が・・・」
4つのスラッシュハーケンを飛ばしただけでなく、軌道修正して武装だけを狙って命中させるなど簡単にできる事では無い。
四聖剣は尚もランスロットに攻撃を仕掛けようとする。
「やめろ!!」
そこへゼロの制止する声が響いた。
「兄様・・・?」
いつもとは違う様子のルルーシュの様子にサフィールは心配だった。
「目的は達成した、これ以上の戦闘は無意味だ。確保した退路を使い直ちに撤収する!」
「・・・了解!」
月下からチャフスモークを展開されて煙幕が張り、サフィール達は敵を近づけないよう弾幕を張る。
こうして当初の目的である藤堂中佐の救出は成功した。
だが、アジトに戻ってもゼロは無頼から降りてこず、カレンの表情も暗くサフィールは喜ぶ事が出来なかった。

第18話

チョウフ基地での戦闘から数日が経ち、サフィールはアジトの自室にいるルルーシュに会いに行っていた。
「ゼロ、少しよろしいでしょうか？」
「ああ、構わない」
部屋に入るとそこではルルーシュは仮面を外して何か作業をしていた。
「どうした、サフィール？」
「実は・・・」
サフィールはジャレミア達がディートハルトにゼロと思わしき少年の調査を命じた事を話した。
「なるほど。あいつの情報収集力は侮れないから注意する必要があるな」
「はい、なので報告しておくべきだと思って」
「(そうなるとサフィールとディートハルトを接触させるわけにはいかないな。サフィールから俺の正体に気づかれてしまう可能性がある)」
藤堂達が黒の騎士団に合流したため、再編成している組織図にはサフィールに部隊長の役職に就いて貰うつもりだったが、先程の話を聞いて役職に就かせない事に決めた。
「あの、兄様？」
「ん？ああ、すまないな。わざわざ知らせてくれてありがとう」
「それよりも兄様・・・あのランスロットのパイロットについて何か知っているんですか？」
サフィールはチョウフ基地での戦闘で様子がおかしかったため尋ねる。
「ランスロット？サフィール、お前はあの白兜のパイロットがスザクだと知っていたのか？」
「・・・はい。河口湖でのお礼を言いにいった際に」
「・・・そうか。実は、スザクは俺とナナリーが日本に送られたときに

できた友達なんだ」
ルルーシュがスザクと友達だった事を告げると、サフィールはその事実に驚いていた。
「そんな・・・それじゃあ兄様とスザクは・・・」
友達同士でありながらお互い知らずに戦っていた。
そのことにサフィールは辛そうな表情をしていた。
「ああ。俺もお前と同じ気持ちだったよ」
ルルーシュにとっても自分の計画を悉く邪魔する存在の正体が、友達であるスザクであろうとは想像出来なかった。
「それでも俺は前に進むつもりだ」
「でも兄様それじゃ・・・」
このままではまたルルーシュとスザクが戦ってしまいかねないことに、サフィールは止めるべきか迷っていた。
「ふっ、そんな顔をするな。俺もスザクと戦うつもりはないよ。対話できる機会があればあいつに仲間なるよう説得するつもりだ」
心配そうにするサフィールの頭を撫でながらルルーシュは言う。
「・・・分かりました。でも、あまり無茶はしないでください」
「わかったよ。相変わらず心配性だな」
「心配ぐらいしますよ。大切な事ですからね」
それからサフィールはルルーシュと他愛のない話をして楽しい時間を過ごした。
数日後、ラクシャータがインド軍区から調達してきた潜水艇の中でルルーシュが作成した黒の騎士団の組織図が発表されていた。
軍事総責任者には合流した藤堂。
情報全般の総責任者にはディートハルトに任命されたが、やはりブリタニア人だという事で一悶着起きた。
しかし、ゼロ自身日本人でない事を明かしたことによる説得によりどうにか収まった
副司令に扇が選ばれたが、本人はあまり気乗りしなかったが一番の古株である事から副司令になった。
技術開発担当にはラクシャータとなり、本人は当然だという表情

だった。
そして、カレンは零番隊というゼロの親衛隊の隊長になった。
カレンはゼロの親衛隊の隊長を任された事にとても喜んでいた。
その後も各隊の隊長が発表されていく。
「第二特務隊隊長玉城真一郎、以上だ」
「よっしゃー！」
自分の名前が呼ばれ玉城が喜んでる中、カレンはサフィールとC．C．の名前が呼ばれてない事に気づいた。
「え？フィールとC．C．は役職なし？」
その二人は部屋の後ろにおり、C．C．は興味ないとばかりに髪をいじり、フィールは名前が呼ばれていない事に気にしていない様子だった。
「ゼロ、一つよろしいでしょうか？後ほど協議すべき議題があります」
それからアジトに戻り幹部達でディートハルトが言った議題について協議されている頃、サフィールは潜水艇の格納庫で携帯端末で放送されたスザクの騎士任命式を見ていた。
「スザクがユフィ姉様の騎士か・・・」
確かにスザクは騎士として相応しい実力を備えているが、彼は日本人だ。
周りのブリタニア貴族はそんなスザクを騎士として認めるとは思えない。
表面上は何も言わないだろうが、陰ではスザクに対してありもしない事を言っているはずだ。
「それにしてもユフィ姉様は無茶するなあ・・・」
騎士の任命は皇族の特権ため、総督であるコーネリアも口出しは出来ない。
だが、内心では色々と言いたい事はあるはずだろう。
コーネリアはユーフェミアを溺愛しているため、騎士には自分が信頼できる人間に任せたかったはずだ。
「はぁ・・・本当にどうなるんだろ」
このままではまたルルーシュとスザクが戦うという状況になるか

もしれない事を考えると不安で心配だった。
「兄様も説得するというけど」
実際、あのスザクを無力化する事が出来るのだろうか。
ＫＭＦの操縦技術は言わずもがな、軍属であるならそれなりの体術はできるはず。
そう思い一人格納庫でサフィールは悩んでいた。
そんなサフィール達にチャンスが訪れた。
ブリタニア本国の要人を迎えるために、副総督であるユーフェミアが式根島という島に向かっているという情報を入手した。
当然騎士であるスザクも同行するはずだ。
式根島は戦略拠点では無いため戦力は少ない。
そこでゼロはランスロットを無力化して捕獲し、スザクを捕虜にして仲間になるよう説得する作戦を立案した。
折角のチャンスを無駄にしないため、サフィールは気合いが入っていた。
「（兄様のためにも頑張らないと！）」
直ぐさま黒の騎士団は潜水艇で式根島に向かった。
そんな気合いの入ったサフィールの任務はラクシャータ達の護衛だった。
この作戦の決め手であるラクシャータ達が開発した、ゲフィオン・ディスターバーと呼ばれるジャミング装置を設置しなければいけない。
作戦では味方の救援に現われたランスロットを、ゼロを囮にして装置の場所に誘き寄せて無力化する。
そのためこの装置は非常に重要な物のため、破壊されるわけにはいかず気の抜けない任務である。
そして、黒の騎士団はブリタニア軍に気づかれず式根島に上陸する。
基地を襲撃する藤堂の部隊に、ランスロットを誘き寄せるゼロの囮部隊、最後にゲフィオン・ディスターバーの設置と護衛する三つの部隊に別れて行動を開始する。

予定通りに藤堂の部隊が基地を襲撃により、守備隊は混乱をきたしていた。
「こっちは準備ＯＫよ」
ラクシャータから装置の設置が完了した事が伝えられ、サフィールはゼロに通信をつなげる。
「わかりました。ゼロはこちらの準備は完了しました」
『そうか。こちらも現われたところだ』
その言葉から予想通りランスロットは現われたようだ。
「ではこちらも移動を始めます」
このポイントにランスロットを誘き寄せるため、一旦サフィール達護衛部隊はこの場を離れる必要がある。
『ああ、頼む』
通信を切りサフィール達はこの場所から一旦離れる。
そして、予定通りゼロが囮となってランスロットを誘き寄せ、二機は砂丘を飛び越え窪地にそこへ向かう。
ランスロットが無頼のアサルトライフルを弾き飛ばし、ＭＶＳを無頼に突きつける。
そこへラクシャータがゲフィオン・ディスターバーを起動し、範囲内の二機は動かなくなった。
それに合わせて藤堂達やサフィールは姿を現し窪地を包囲する。
「出てきてくれないか、枢木スザク」
機体から降りたゼロの呼びかけに、少ししてスザクも機体を降りる。
そこからゼロが仲間になるようスザクを説得する。
「兄様・・・スザク・・・」
会話の内容はこちらには聞こえず、サフィールは上手くいくように祈るしかなかった。
しばらくしてスザクはゼロの持っていた銃を奪い、ゼロの頭へ突きつける。
そのままスザクはゼロをランスロットのコックピットに誘導する。
「一体何を・・・？」

スザクの突然の行動に驚いていると、レーダーに多数の反応を感知した。
「これが味方に対してやる事なのか！」
いくらスザクがナンバーズだとしても味方である事に変わりはない。
そんな味方もろとも敵ごと撃とうというやり方に怒りが湧き上がった。
『ゼロ！』
ゼロを助けようとカレンはゲフィオン・ディスターバーの範囲内に入り込んでしまい、紅蓮弐式は動かなくなった。
『全機弾幕を張れ！全弾撃ち尽くしても構わん！』
藤堂の命令一下、黒の騎士団はゼロを守るために全力で対空射撃を開始する。
ミサイルを次々と撃ち落としていき、これなら大丈夫だと誰もが思っていた。
「あ、あれは・・・・・・!?」
残り少なくなったミサイルの背後から、空を飛ぶ巨大な航空戦艦の影がサフィール達を覆った。
団員が航空戦艦へアサルトライフルを向けて撃つも、何かシールドのような物が展開されており通用していなかった。
そして、航空戦艦の下部ハッチが開き、そこに何か光が見えた。
下部ハッチから見えた赤黒い光は窪地に向かって降り注いだ。
「兄様ーーーー!!」

第19話

「兄様・・・カレン・・・スザク・・・」

航空戦艦の下部ハッチから降り注い赤黒いが窪地に降り注ぎ、着弾した衝撃によって爆煙が発生したため窪地の状況が確認できなかった。

大切な家族と仲間と友達を失ってしまったことに対し、サフィールはただ呆然としていた。

「何をしている！早く退避しろ!?」

藤堂の声にサフィールは今は戦闘中であることを思い出した。

「ゼロとカレンは!?」

「不明だ。しかし我々はここで全滅するわけにはいかない。ここは撤退する！」

「ですがゼロとカレンが!?」

「尚のこと今は撤退するべきだ。ここで全滅しては二人の捜索は出来ん」

藤堂の言う通り、ここで全滅してしまえば二人を捜すことは出来ない。

「・・・・・わかりました。紅蓮は私が運びます！」

サフィールは主がいない紅蓮を運び、藤堂達と共に撤退する。

守備隊が壊滅していたお陰で、追撃されることなく撤退することは出来た。

潜水艇へと帰還したゼロとカレンを除いた黒の騎士団は急いで式根島から離れた。

式根島から離れた黒の騎士団は今後の行動をどうするかで割れていた。

一方はディートハルトのここに残ってゼロの捜索をすること。

もう一方は藤堂の一度エリア11に戻って態勢を立て直すこと。

この二つの案に黒の騎士団は割れていた。

そんな中、サフィールはただ一人格納庫で主なき紅蓮を見上げてい

た。
「心配か?ルルーシュとカレンが?」
そこへC．C．が声をかけてきた。
「そんなの当然ですよ。兄様もカレンも大切な家族で親友なんです」
「そうか・・・もし私が二人の居場所を知ってると言ったら、お前は信じるか?」
「信じます」
サフィールの即答にC．C．は少し驚いていた。
「まったく、私が嘘をついているとは思わないのか?」
「思いませんよ。C．C．さんは人を揶揄うときは嘘をついたりしますけど、こういう時はそんな嘘をつかないて信じてますから」
当然のようにいうさサフィールにC．C．はくすりと笑っていた。
「こんな魔女を信じるなんて、馬鹿なのかただ変わってるのかわからないな」
「ば、馬鹿って酷いですよC．C．さん!」
「ふふ、さて二人は神根島にいる」
「神根島?」
聞いたことのない島の名前にサフィールは首を傾げる。
「式根島の近くにある島だ」
「そうですか。なら急いで扇さん達にこの事を伝えないと」
「無駄だと思うぞ」
「どうしてですか?」
ゼロとカレンがそこにいるなら急いで向かうべきだろう。
「情報元が私では信じて貰えるか分からないからな」
「そ、それは・・・」
黒の騎士団内でのC．C．の立場はあまり良いとはいえない。
ゼロが連れてきた謎の少女。
素性も一切わからないため、団員達はゼロとの関係を訝しんでいる。
中には愛人だという者もいるほどだ。
「だったら私一人でも助けに向かいます!」

「そうか。・・・何をしている早く助けにいくんだろう」
「え?でもどうやって神根島まで?」
「ラクシャータが回収したポートマンがある。それで行くぞ」
確かに研究用としてポートマンを回収していたのを思い出す。
「・・・もしかしてC．C．も一緒に来てくれるんですか?」
「ああ。お前一人で行かせたら何処ぞのブラコンがうるさいからな。それとも何だ、私は邪魔だと言いたいのか?」
「いえ、C．C．さんも一緒なら心強いです!」
「ふっ、本当に変わったやつだよ」
そして、サフィールとC．C．はポートマンに乗り込み神根島に向かうのであった。
潜水艇から発艦したポートマンはブリタニアの哨戒部隊やあの飛行戦艦に見つかることなく、無事に神根島に到着した。
「さて、探すとするか」
「ええ、でもブリタニア軍がいるかもしれないので気をつけて探しましょう」
二人は森の中に入ってルルーシュとカレンの捜索を始める。
しかし、二人だけのためそう簡単には見つからなかった。
「二人はどこにいるんだろう?」
ルルーシュとカレンがこの島にいることがわかっていても、二人が何処にいるかわからないため捜索は中々進まなかった。
「あれ?誰かいる?」
その時、サフィールは歳は自分と変わらない幼さ残る少年を見つけた。
「C．C．さんあそこみ人が・・・」
「サフィール!」
C．C．に少年のことを知らせようとしたサフィールは、気づけばC．C．に手を引かれていた。
「え?これは一体?」
「話は後だ。今は逃げるぞ」
手を引かれたサフィールは一体何が起きたのかわからなかった。

そうして少年から逃げる二人は少し開かれた場所で探していた人物を見つけた。
「ゼ・・・!?」
しかし、そこにいたルルーシュとカレンだけでなく、スザクとユーフェミアもいたのだ。
「(どうしてスザクとユフィ姉様が!?」
まさかの二人にサフィールはC．C．と共に身を隠す。
この時、予想外の出来事が起きた。
ルルーシュ達のいる場所が赤く輝きだすと四人の姿が消えたのだ。
「これは一体!?」
あまりの出来事に呆けていると、C．C．がサフィールの腕を引く。
「・・・この島を出るぞ」
「え!?ですが兄様達が!」
「あいつなら大丈夫だ。それよりも私たちは潜水艇に戻っていた方がいい」
「ですが・・・」
見つけたはずの二人が何処かに消え、ここで戻ることにサフィールは納得できなかった。
「それに・・・私達も安全というわけではない」
「え?」
後ろを見ると、先程の少年がこちらに向かってきていた。
「・・・・・わかりました」
「いくぞ」
そして、サフィールは再びC．C．に手を引かれ、ポートマンを隠してある岩場まで走り出す。
途中後ろを振りかえると、少年は依然と近づいてくる。
「(一体彼は何者なんだ?)」
明かに軍人ではない少年にサフィールは走りながら考える。
そうして走っていると、何処かから大きな爆発音が聞こえた。
爆発音に少し驚くもサフィール達は急いで走り出す。

「あれ?いない・・・?」
もう一度後ろを振り返ったサフィールはあの少年がいないことに気づいた。
「おい!ポートマンを見つけた。私達は急いでここを出るぞ」
「は、はい!」
こうしてサフィール達は潜水艇に戻った。
サフィール達が戻った後、ゼロからの通信が来た。
奪取したＫＭＦでカレンと共に移動しているそうだ。
ゼロ達が戻ったことに団員達は大いに喜んでいた。
一方でサフィールは無断で出撃したことを厳しく叱られるのであった。

第２０話

エリア１１に戻る黒の騎士団が早速行ったことは、ゼロとカレンが奪取したガウェインと呼ばれる黒い大型ＫＭＦの調整だった。

このガウェインと呼ばれる機体にはフロートユニットと呼ばれる飛行装置がある。

この装置によってＫＭＦは空を飛ぶことができるらしい。

しかし、この装置を調べたラクシャータは興味深そうにしていたが、同時に嫌そうな顔をしていた。

他にもドルイドシステムと呼ばれる電子解析システムに、両肩にハドロン砲と呼ばれる加粒子砲が装備されている。

だが、このハドロン砲はまだ未完成らしく、収束して発射することができないらしい。

ちなみに式根島で黒い光はこのガウェインのハドロン砲だったらしい。

このガウェインの調整とハドロン砲の完成はラクシャータ達技術班に任されている。

そして、サフィールは技術班の雑用に駆り出されていた。

どんな理由があっても無断で出撃したため、サフィールは雑用という罰則を科せられた。

無論Ｃ．Ｃ．にも罰則を科せられるのだったのだが、その前にＣ．Ｃ．は何処かに行ってしまい科せることができなかった。

「その機材はこっちよ～」

「はい！」

「ああ、それとその機材はしまっといてね」

「は、はい！」

ラクシャータから指示通りに機材を持ってくれれば、しまったりなどサフィールは雑用に励んでいた。

そこへゼロが様子を見に格納庫に来た。

「調整はどうだ、ラクシャータ？」

「う～ん、ゲフィオンディスターバーの応用でハドロン砲の収束も何

とかなりそうね。機体のほうも問題ないわよ」
「そうか。それなら彼は必要ないな？」
「そうね。まあ坊やがすることはもうないしね」
そう言ってラクシャータは、サフィールやゼロのことなど放っておいてガウェインのフロートシステムを調べ始めた。
「こい、サフィール」
「はい、ゼロ」
そして、サフィールはゼロに私室まで連れてこられた。
私室に入って扉をロックするとルルーシュはマスクを外した。
「雑用は大変だったろう？」
「はい、大変でしたけど私が悪いので仕方ないです」
「まったく！サフィールはキチンと雑用に取り組んでいるというのにあの女は」
ルルーシュはサフィールが一人雑用に励む中、C．C．は何もしなかったことにお冠のようだ。
「いいんです兄様。C．C．さんは私のためについてきてくれたんです」
「しかしだな、はぁ…まあいい。お前がそういうのなら俺もこれ以上は言わないよ。とはいえ、俺としてはお前にはあまり危険な真似をしてほしくはないんだがな」
「す、すいません兄様。でも、兄様とカレンが心配で……」
「お前が謝ることじゃないよ。お前が探しに来てくれてことに俺は嬉しかったよ」
俯くサフィールの頭にルルーシュは手を置いて撫でる。
「兄様……」
ルルーシュの言葉にサフィールは嬉しそうにしていると、扉をノックする音が聞こえる。
「ゼロ、少しよろしいでしょうか？」
ノックしてきたのはディートハルトのようだ。
「ああ、少し待て」
ルルーシュは仮面をつけ、扉のロックを解除する。

「失礼します。実はキュウシュウブロックのフクオカ基地が日本軍を名乗る武装勢力に占拠されました」
「ほう？」
傍で話を聞くサフィールは日本軍と聞いて、気になったのは日本という言葉だった。
「こちらが掴んだ情報では首謀者は澤崎という日本人です。そして、その後ろ盾には」
「亡命先の中華連邦がいるということか」
「はい。すでに団員達もニュースで聞いたためどうすべきか迷っているようです」
確かに中華連邦の後ろ盾があると言え、日本軍と名乗っている。合流すべきかどうか迷う団員がいてもおかしくはない。
「フィール、お前はどう考える？」
「え？」
突然振られたことに驚くも、落ち着いて冷静に答える。
「私は……合流すべきではないと考えます」
「ほう？」
「何故そう答える？」
ディートハルトは興味深げにし、ゼロは続きを促す。
「日本軍と名乗っていますが所詮は中華連邦の傀儡です。それに一基地を占拠しただけで、現状は優位に立っていますがそれも時間の問題です」
「どうしてそう言えるんだ？」
「借り物の力でコーネリアに勝てるとは思えないからです」
現在ブリタニア軍は海上からの上陸作戦を展開している。
当然日本軍も防衛ラインを構築しているが、中華連邦の主力ＫＭＦの鋼髏（ガン・ルウ）は量産性は高いもののあらゆる点でサザーランドに劣っている。
数だけでコーネリアの精鋭部隊を止められるとは思えない。
「最後に黒の騎士団は正義の味方でしょう？」
そう言って二人を見ると、ディートハルトは面白そうにしゼロは仮

面で表情は見えないが笑っているように見えた。
「確かにそうだな。黒の騎士団は正義の味方だ」
「何方へゼロ？」
「折角の機会だ、ガウェインの試運転には丁度いい」
部屋を出たゼロは格納庫に向かい、サフィールもそのあとをついていく。
「ゼロ、ガウェインで出るとしてももう一人のパイロットは？」
「それならうってつけの奴がいる。いるんだろC．C．？」
「気づいていたか」
近くの通路から拘束着ではなく、パイロットスーツに着替えたC．C．が現れた。
「なんとなくだ。それよりもガウェインの操縦はできるな？」
「一通りのシミュレーションは終わらせたよ」
「そうか。早速だがその成果を見せてもらうぞ」
「やれやれ、人使いの荒い坊やだな」
「うるさいぞ魔女」
こうして三人は格納庫に到着し、ゼロとC．C．はガウェインに搭乗する。
そして、潜水艇を海上に上げると、ガウェインはエナジフィラーのパックを手に持ち出撃した。
「（どうしてエナジーフィラーのパックを？）」
サフィールのこの疑問も後に知ることになる。
その後は上空から上陸するも物量に押されてピンチに陥ったランスロットに、ガウェインはエナジフィラーを手渡した。
そして、黒と白のＫＭＦは司令部へと叩こうと進撃する。
二機のＫＭＦを鋼髏（ガン・ルウ）や戦闘車両ごと気に止められるわけもなく、キュウシュウ基地の防衛部隊をランスロットとガウェインはいともたやすく打ち破っていた。
そうして逃亡を図ろうとした澤崎はランスロットによって拘束された。
翌日にはコーネリアの手柄になるだろうが、この戦いによって黒の

騎士団はブリタニアの目を逃れてエリア11に戻ることができた。
その上、黒の騎士団の立場を全世界に伝えることに役立つこともできたのであった。

第21話

それは突然のことだった。

『今すぐ指定のポイントに来い。それと変装することは忘れるな』

黒の騎士団本部のあてがわれた私室で過ごしていたサフィールに突然C．C．から

呼び出された。

端末に送られたポイントは租界の中であるため、無断で行くわけにはいかずルルーシュに連絡を取ってみる。

「あれ？出ないな…？」

普段なら連絡すれば出るはずが、この時ばかりは出てこなかった。

「……まさか、兄様の身に何か？」

そう考えれば自分を呼ぶ理由も納得できる。

カレンは別の用事で騎士団を休んでいる。

他の団員では租界で目立つが、サフィールであればブリタニア人であるためあまり目立つことはない。

サフィールは急いで変装して指定されたポイントに向かうのであった。

「えっと……これは一体？」

急いで指定されたポイントに向かったサフィールだったが、向かった先はアッシュフォード学園と呼ばれる学園だった。

しかも、何やらイベントをしているのか騒がしく園内には屋台が多く、生徒以外の一般の来場者も多くみられた。

突然呼び出されて緊急事態かと思えば、学園のイベントという事実にサフィールは頭を抱える。

「どうしたの君？」

「え？あ、いえ私は…」

「もしかして迷子？」

頭を抱えるサフィールに受付の生徒が声をかけてきた。

どう答えるべきか迷っていると、サフィールは見覚えのある人物を見つけた。

「すいません！私はこれで！」
「あ、ちょっと…！」
受付を振り切って学園に入ったサフィールは目的の人物に近寄る。
「ん？遅かったな」
それはこの学園の制服を着たＣ．Ｃ．だった。
「遅かったじゃないですよ！緊急事態って言ってましたけど、これのどこが緊急事態何ですか？」
「ふっ、流石のお前もこれを見れば事の重大さがわかるだろう」
そういってＣ．Ｃ．が取り出して見せたのは、ＫＭＦによって作られる世界一のピザと書かれたチラシだった。
「……まさか、これですか？」
「そうだ。折角だからお前にも味わせてやろうと思ったんだ、感謝しろよ」
自分が作るわけでもないのに堂々とするＣ．Ｃ．にサフィールは言葉が出なかった。
「そうですか。それでは私はこれで…」
「待て、始まるまで暇だから一緒に回るぞ」
「え⁉ちょっと……⁉」
本部に帰ろうとするサフィールをＣ．Ｃ．は腕を掴むと、無理やり学園を連れまわし始めた。
様々な屋台や見世物を回っていたサフィールは初めて体験することばかりで、今では笑顔で楽しんでいた。
そんな楽しそうにするサフィールを見たＣ．Ｃ．は笑みを浮かべていた。
「そういえば、その世界一のピザはいつ始まるんですか？流石にマスコミや軍人がいるので長居するわけには……」
ちらほらと見えるマスコミや軍人の姿にサフィールは落ち着く。
そして、楽しんでいたサフィールは今回の目的ともいえるメインイベントである、世界一のピザがいつ作られるかＣ．Ｃ．に尋ねる。
「知らん」
バッサリと告げられた一言にサフィールは何でそんな堂々とでき

るんだろうと思った。
「わからないなら聞けばいいだろう。そこにいる奴に聞けばいいはずだ」
C．C．はベンチに座っている男子生徒に近づく。
「あれってもしかして……？」
サフィールは座っている男子生徒の後姿に見覚えがあった。
「おい！お前！世界一のピザというのは何時できるんだ？」
男子生徒は立ち上がって振り返る。
「何だ、いたのか」
その男子生徒はルルーシュだった。
「勝手に行動する…なっ!?」
うろちょろしているC．C．に苦情を言おうとしたルルーシュは、C．C．の近くにいるサフィールに気づき驚いていた。
「こっちへ来い！」
ルルーシュはC．C．の腕を掴むと、急ぎ足で何処かへ移動しサフィールもその後をついていく。
「お前は何を考えているんだ！この大事な時に勝手なことをするな」
倉庫までC．C．とサフィールを連れてきたルルーシュは当然のごとく怒っていた。
「世界一のピザとあるからこいつにも折角だから食べさせてやろうと思ったんだ」
「すいません兄様、勝手なことをして」
詫びる気すらないC．C．と申し訳なさそうにして謝るサフィールにルルーシュは頭を抱える。
「いや、サフィールは悪くない。悪いのはそこの魔女だ」
「酷い言いようだな。こいつだって随分と楽しんでいたぞ」
「だからといってマスコミや軍人いるんだぞ。サフィールの正体がばれたらどうする？」
「兄様、C．C．さんを責めないでください。私がすぐに本部に戻ればよかったのに、一緒に回っているうちに楽しくなって……」

C．C．を庇うサフィールにルルーシュは溜息を吐く。
「はぁ……ピザは俺が持っていく。それまで人に見つからないところで待ってろ」
「食べるなら出来立てがいい」
妥協したルルーシュに対して、C．C．は我儘な要求をしてきた。
「俺の話を聞いていなかったのか。マスコミや軍人がいるんだぞ！」
「だったらこいつのように変装道具を持ってこい」
ああ言えばこう言うC．C．にルルーシュは頭が痛くなってきた。
そこへ誰かが倉庫に入ってきた。
C．C．とサフィールは物陰に隠れ、ルルーシュは誰が入ってきたか確認する。
入ってきたのはカレンと扇にブリタニア人の女性だった。
「（あれって……ヴィレッタ？）」
しかし、サフィールは女性に見覚えがあった。
雰囲気はだいぶ違うが、純血派の副隊長であるヴィレッタだ。
どうしてヴィレッタが扇と一緒にいるかわからずに混乱する中、さらに倉庫に誰かが入ってきた。
入ってきたのスザクとオレンジ色の髪の女子生徒だった。
カレンはすぐに扇とヴィレッタを物陰に隠して女子生徒と話し始める。
「まったく面倒な…」
ルルーシュは状況を打開するためにトランクからスイッチを取り出す。
「すみません兄様」
「だったらギアスを使えばいいだろう」
「C．C．！ここでそれは言うな！」
C．C．が打開策としてギアスを使うことを助言するが、サフィールがいる前であるためかルルーシュは小声ながらも諫める。
当のサフィールはカレンやスザクたちのほうを気にしており聞こえていなかった。
「それに今扇とよくわからない女にギアスを使うのは危険すぎる。そ

れに……ほかのメンバーは使用済みばかりだ」
「自業自得だな。よく考えもせずに使うからだ」
「お前は！今の状況を！」
「お、落ち着いてください兄様！」
危険な状況であるのに何とも思わないＣ．Ｃ．に苛立つルルーシュに、兄の小声ながらも怒る声にサフィールは慌てて落ち着かせる。
「あれ、ルルーシュ？そこにいるの？だったら話したいことがあるの」
声が聞こえたのか女子生徒がルルーシュを見つけ話しかけてきた。
「ひとまず、お前とサフィールは逃げろ。シャーリー、後でいいかな？」
ルルーシュは立ち上がってシャーリーという女子生徒に近づく。
サフィールとＣ．Ｃ．は隠れて逃げる機会を窺っていると、パネルが倒れピンク色のスモークが倉庫内に噴射された。
「やれやれ、何をやっているんだか。行くぞ、サフィール」
「は、はい！」
二人はこのパニックに乗じて急いで倉庫から出た。
その後はピザができるまでの学園の屋上で待つことにした。
そして、遂に世界一大きいピザ作りが始まった。
このアッシュフォード学園が所有する第３世代型ＫＭＦガニメデに搭乗するスザクの操縦によって、ピザを器用に回し始める。
「凄いなぁ……」
幾ら熟練のパイロットでもあんな簡単に生地を回すことが難しいと思われる。
それをスザクは見事に回す姿にサフィールは感心していた。
「やっと始まったか。随分と長かったな」
紙皿を手に持つＣ．Ｃ．は長く待っていたことに退屈していた様子だった。
ピザを食べたらあとは本部に戻るだけのため、出来るのを待つだけだったがここでハプニングが発生した。
ユーフェミアがお忍びでこの学園に来ていたことがバレてしまっ

た。
　そのせいで生徒たちや来場した一般客にマスコミがユーフェミアに殺到し始めた。
「ユフィ姉さま!?どうしてここに?」
　サフィールはユーフェミアがいたことに驚きをあらわにしていた。
　そんな中、C．C．C．だけはある一点を見ていた。
「ピザが……」
　それは木に引っかかったピザだった。
　この騒ぎで操縦に集中していたスザクは、ユーフェミアに気を取られてピザを落としてしまったのだ。
　C．C．は悲しげな様子で落ちたピザを見ていた。
　そうしてる間にスザクがガニメデで人混みからユーフェミアを救い上げた。
「よかった…」
　姉が助かったことに安堵するサフィールだったが、次の瞬間予想もしないことが起きた。
「私、ユーフェミア・リ・ブリタニアはフジ山周辺に行政特区日本を設立することをここに宣言します！」
「え?ブリタニアが日本を……認める?」
　ユーフェミアの宣言にサフィールは呆然とするしかなかった。
　ユーフェミアはゼロにも特区への参加を呼びかけ、来園していた日本人はこの宣言に喜びの歓声をあげていた。
　突然の宣言の呆然としたサフィールは、しばらくして落ち着くと急ぎ足で本部に戻るのであった。

第22話

ユーフェミアが宣言した『行政特区日本』。
この宣言は大きな反響を呼び、多くの日本人たちが参加を希望していた。
以外にもブリタニア行政府の対応は早く、この動きから以前より計画していたことがわかる。
そんな中、黒の騎士団ではこの行政特区の議論が交わされていた。
「サフィール、私達どうすればいいの?」
議論が交わされる中、サフィールにカレンが話しかけてきた。
「正直に言えば、どうしようもないですね」
何せ特区に参加する日本人の中には団員もいるのだ。
「ここで私たちが反対しても特区に参加する日本人達から裏切り者と呼ばれるはずです」
「裏切り者って私達は日本のために!」
日本のために戦ってきたのに裏切り者と呼ばれるいわれはない。
「今のは私の言い方が悪かったかもしれませんが、近いことを言われるのは確実です」
「どうして?私達は、日本を取り戻すために戦ってきたのに」
落ち着いたカレンは顔を俯かせる。
「途中で入った私がこんなことを言うのはおこがましいですが、カレン達がこれまで戦ってきたことを無駄にしないためにどうするべきか考えましょう」
「サフィール……」
顔をあげたカレンの顔には少しだけ元気が戻っていた。
「それに、私は落ち込んでいるよりも元気なカレンの姿が好きですよ」
「な、何言ってるのよ!?」
サフィールの言葉にカレンは顔を赤くし、言った本人はどうして顔を赤くするのかと首をかしげる。
「(でも、考えるとは言ったけども手の打ちようがない)」
参加しなければ黒の騎士団を支持してきた日本人達から敵扱いさ

れ、ブリタニアは賛同しない反乱分子として討伐の大義名分を与える。
しかし、参加してしまえば黒の騎士団はブリタニア取り込まれてしまう。
どう転んでもブリタニアが得するだけである。
議論が今も続く中、サフィールは一人ラウンジを出る。
そして、携帯を取り出してルルーシュに電話をかける。
『どうした、サフィール？』
「兄様、兄様はユフィ姉さまの特区をどう考えていますか？』
『……ユフィはただ……俺やナナリー、このエリア11に住む日本人達が平和に暮らしてほしいと願ってやったと思う』
何故ルルーシュやナナリーの名前が出たことに疑問があがる。
「もしかしてユフィ姉さまは兄様がゼロだと知っているんですか？」
『……ああ。河口湖ホテルでゼロが俺ではないかと考えていたそうだ。正体を明かしたのは神根島で遭遇した時だ』
ルルーシュらしくないミスにサフィールは意外だと思った。
「黒の騎士団は、兄様は特区に参加するんですか？」
ここでサフィールは団員の誰もが気にかけていることを尋ねる。
『……ああ、参加するつもりだ」
「本当……なんですね…？」
『本当だ。ただし、ユーフェミアの真意を聞くまではだ』
「ほかの団員の皆さんに伝えましょうか？」
『いや、団員には俺から説明する』
「わかりました。……兄様」
『どうしたんだ、サフィール？』
「いえ、何でもありません。それでは…」
ユーフェミアと手を取り合うことはできないのか。
そんな思いを胸の内に秘めながら電話を切り、サフィールはそのまま本部にへ戻るのであった。
そして、ゼロは団員達に特区でユーフェミアと二人だけで話し合い真意を探ることを伝え、団員達は会場の周辺に待機するよう指示され

た。
　遂に特区が始まり黒の騎士団は海上の周辺に待機していた。
　皆が不安な気持ちを持ったまま待機していると、ゼロからの通信が入ってきた。
『黒の騎士団総員に告ぐ！ユーフェミアは敵となった！』
「え……？」
　ゼロから告げられた言葉をサフィールは理解できなかった。
『行政特区日本は我々や日本人達を誘き出す卑劣な罠だったのだ！』
「罠？そんなことはない、あのユフィ姉さまがそんなこと……」
『自在戦闘装甲騎騎部隊は会場に突入し、ブリタニア軍を壊滅し日本人を救い出すのだ！急げ！』
　ゼロの指示に団員達は会場に向かう中、サフィールの無頼改は一人呆然と立ちつくしていた。
「嘘だ嘘だ。あのユフィ姉さまがそんなことするはずがない……するはずがないんだ」
「何してるのサフィール！急いで会場に突入するよ！」
「は、はい……」
　カレンの声に少し落ち着くも、サフィールは未だに信じることができなかった。
「とにかく今は会場に行かないと！」
　真相を知るためにサフィールも会場に急ぐのであった。
　会場に突入したサフィールが見たのは阿鼻叫喚の地獄といっても過言でなかった。
　無抵抗の日本人達がブリタニア軍によって殺されていた。
「ほ、本当にこれをユフィ姉さまが…？」
　目の前で起こる虐殺を本当にユーフェミアが命令したというというのか。
『黒の騎士団か！』
　こちらに気づいたサザーランドがアサルトライフルの銃口をこちらに向けてきた。
「っ！今はお前に構っている暇はないんだ！」

サザーランドが撃つよりも早く接近し、廻転刃刀でアサルトライフルを弾き飛ばしてそのままサザーランドを振り下ろす。
「何処に、何処にいるんだユフィ姉さま……！」
サザーランドを撃破したサフィールはユーフェミアを探し出す。
そうして混戦する会場を探す中、サフィールはガウェインと紅蓮を見つけた。
その2機の傍には戦闘不能にされたグロースターとコックピットから出てきたユーフェミアを見つけた。
「いた！」
すぐに向かおうとしたサフィールだったが、次の瞬間を信じられない光景を目にする。
ガウェインから降りたゼロの手には拳銃が握られており、その銃口はユーフェミアにを向けられた。
「待って、待って兄様！」
兄が何をしようとしているのか理解し、サフィールは止めようと機体を加速させる。
しかし、間に合うことはなく一発の銃弾がユーフェミアを貫いた。
「あああ…うわぁぁぁぁぁぁぁ!?」
大切な姉（ユーフェミア）を大切な兄（ルルーシュ）が撃ったという光景にサフィールは慟哭するのであった。
空から白い影が急接近するが、サフィールは先程の光景によってただ呆然と白い影を見ていた。
白い影はスザクの駆るランスロットだった。
ランスロットはガウェインのハドロン砲をブレイズルミナスで防ぎながら接近し、ガウェインを蹴り飛ばした。
「邪魔をするな！」
そのままユーフェミアを手に乗せて、紅蓮を殴り飛ばして離脱していった。
その様子をサフィールはただ呆然と眺めるだけだった。
黒の騎士団によって制圧された会場にはあの虐殺から生き残った日本人達が集まっていた。

会場にゼロが姿を現すと、その姿を見た日本人達は歓声をあげる。
「日本人よ！ブリタニアに虐げられた民たちよ！私はこれまで待っていた、ブリタニアの不正を影から正しつつ、彼らが自らの行いを省みることを！しかし、私達の期待は虐殺という愚かな行為によって裏切られた！」
日本人達は次々とユーフェミアやブリタニアに対して罵詈雑言を浴びせる。
「そう！ユーフェミアこそブリタニアの偽善の象徴！国家という体裁を保つために虐殺を行った人殺しだ！」
ゼロの演説を聞くサフィールはこれ以上聞きたくないといわんばかりに耳をふさぐが、日本人達は今もユーフェミアとブリタニアに対して罵詈雑言を浴びせる。
「私は今ここにブリタニアからの独立を宣言する。だがそれはかつての日本の復活を意味しない。歴史の針を戻す愚を私は犯しはしない！私達が作る新しい日本はあらゆる人種、主義、歴史を受け入れる広さと強者が弱者を虐げない矜持を持つ国家だ！」
ゼロの語る新しい国に日本人達は今か今かと待ち望んでいた。
「その名は……合衆国日本!!」
ゼロが作る合衆国日本に日本人達はさらに大きな歓声をあげた。
「兄様……」
静かにゼロの演説を聞いていたサフィールは虚ろな瞳で仮面をかぶる兄を見る。